

339

488

伊豆大島

齊藤和堂編



始



339-488

大町桂月先生校閱

齋藤和堂編著

# 伊豆大島

伊豆伊東

精和堂藏版

福住屋發行

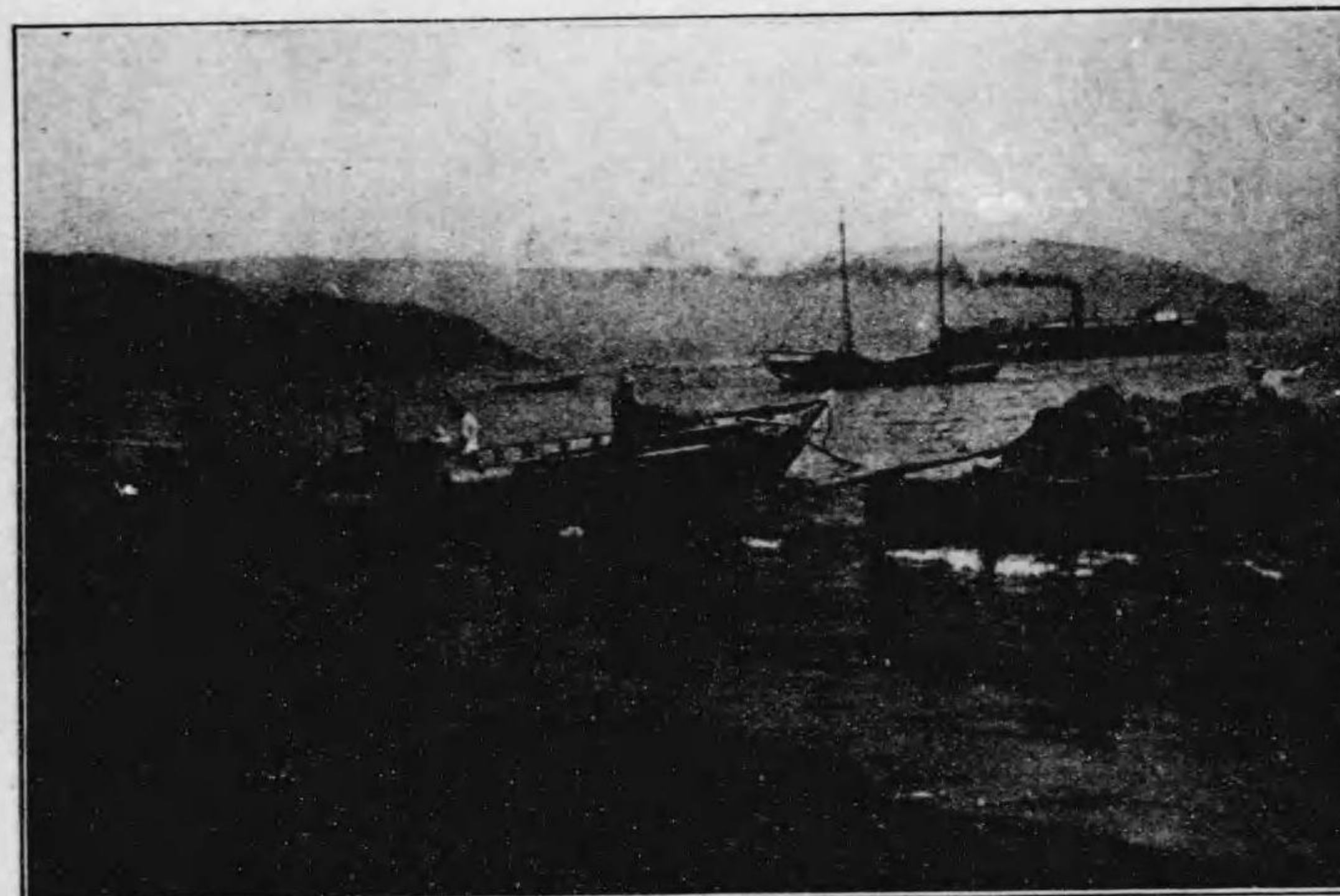
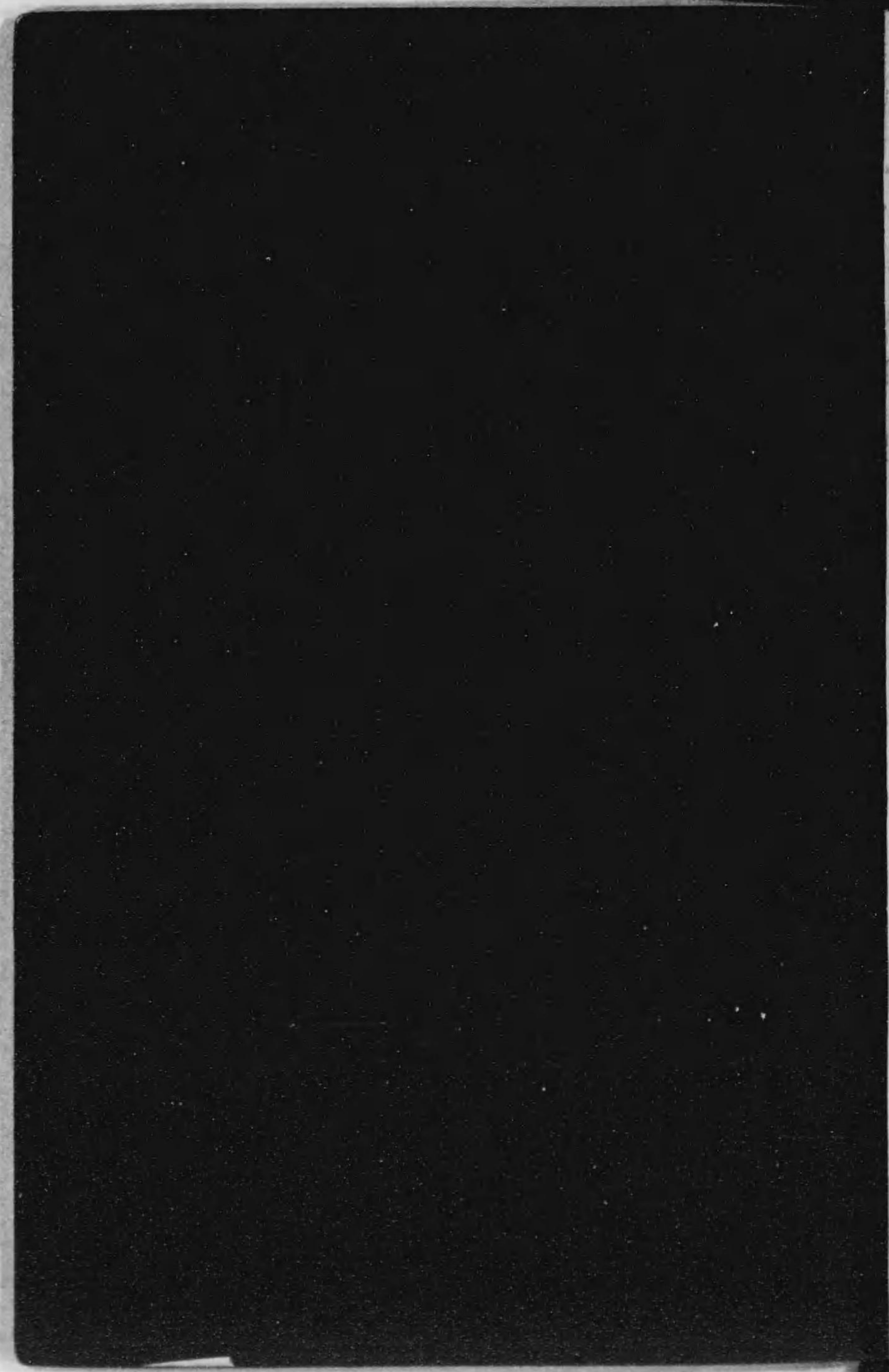
大正  
3. 9. 4  
内交



貯水井大島婦人

大島婦人  
貯水井

露光量違いの為重複撮影



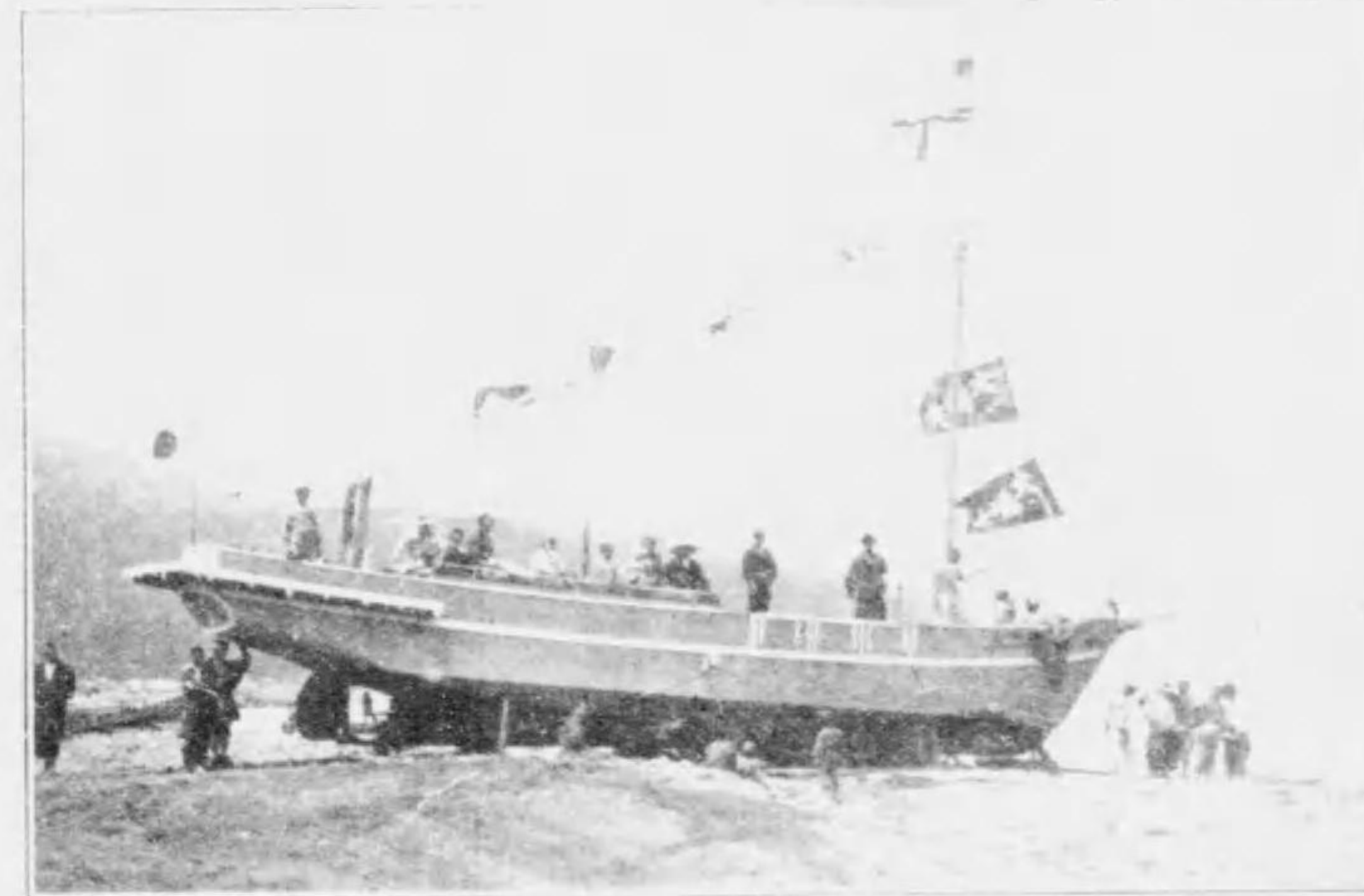
大島汽船伊豆東港より帆出せさんす



大島東周郵便航送機動船『大島丸』



伊豆伊東の船



伊豆伊東の汽船

諸事御便利にして御居心好かれと熱心に勉強仕り特に御滞在の御方に對しては御召上り物など手を變へ品を吟味致し只管顧客本位と相勤め申候間是非共一度御投宿の榮を賜はり度伏而御願申上候

伊豆伊東  
温泉旅館  
貸別荘

# 暖香園ホテル

(電話伊東十八番)

座敷が好く温泉が奇麗で寢道具がサツパリして食物が味ち好く庭園眺望の趣きあるところにて召使等が忠實に働へて手輕に賄ふ家には吾れ人に投宿す

露光量違いの為重複撮影



靜海館正門



靜海館庭前、海水浴場

●當地第一の眺望を有し白砂青松の地にあり空氣清良にして前に近く初島を控へ遠く相模洋を隔て、相武房總の諸山に臨み朝に漁歌を送り夕に漁火を迎ふ又庭前に海水浴場あり食膳には新鮮なる海珍を上すべく起居常に爽快にして實に優遊自適の一樂境に御座候

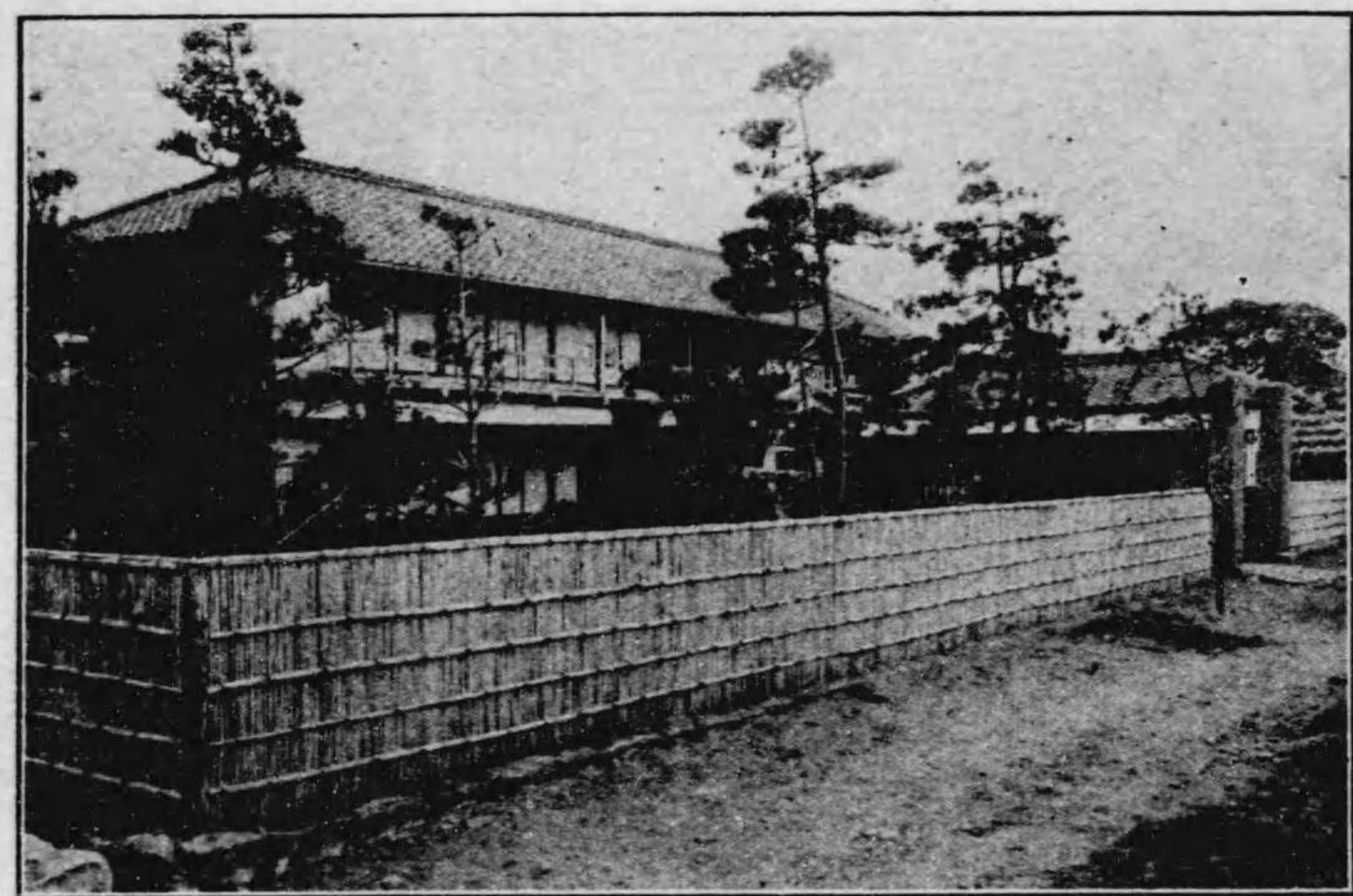
伊豆國伊東町玖須美海濱(汽船發着所ヨリ數十歩)

溫泉及  
海水浴  
旅館  
靜海館  
敬白

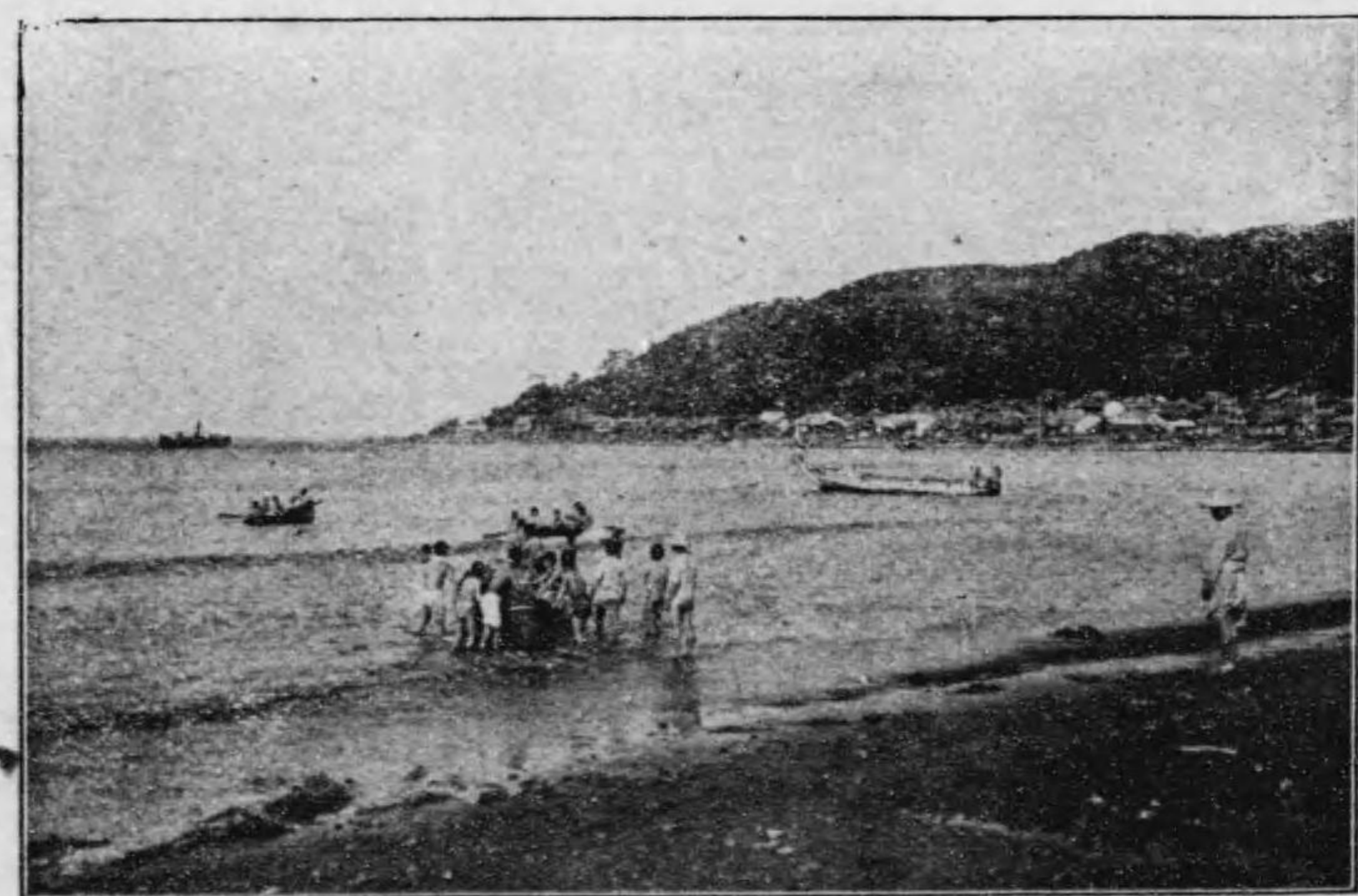
特設電話伊東八番

●溫泉は最も良好なる食鹽泉にして陸軍二等藥劑官從七位勳五等功五級澤野基徳君の分析によれば他の溫泉に比し拾數倍の格魯兒分を含有し儂麻質斯胃腸疾患生殖器病其他諸病の快復期及虛弱にして屢々感冒に罹り易きものに顯著の特効ある事諸大家の確證せられたるものなり

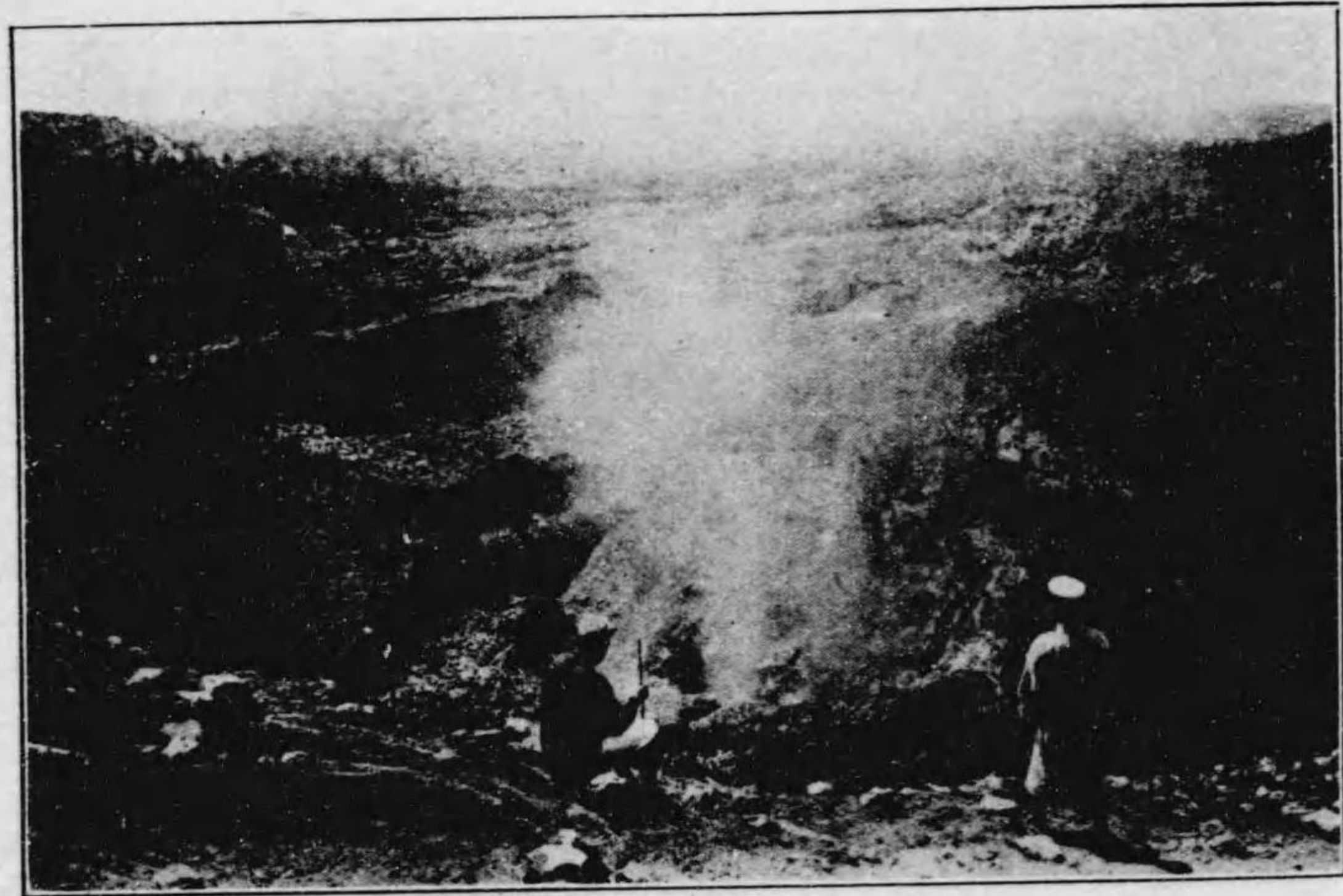
露光量違いの為重複撮影



門正館海靜



場浴水海の庭前館海靜

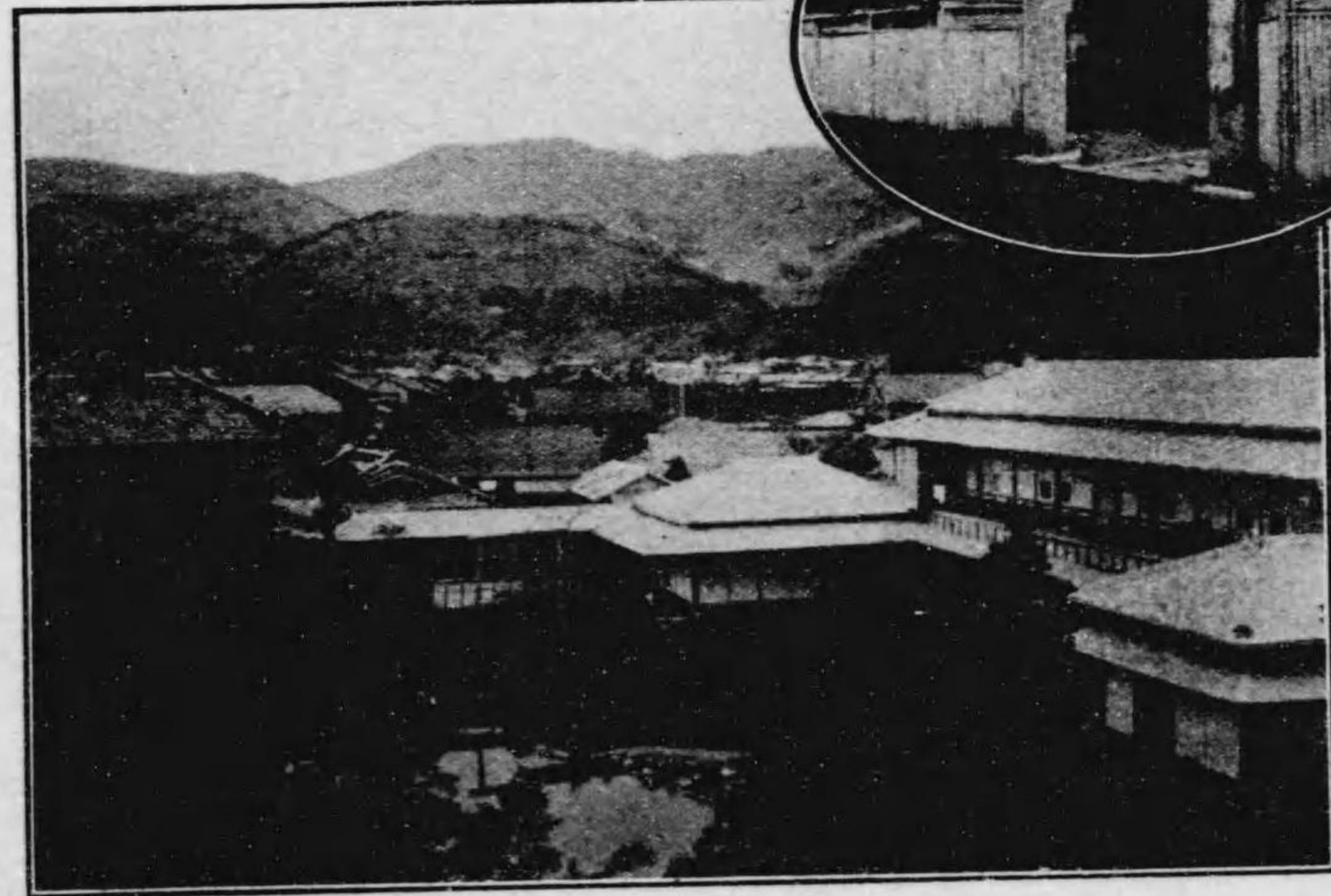
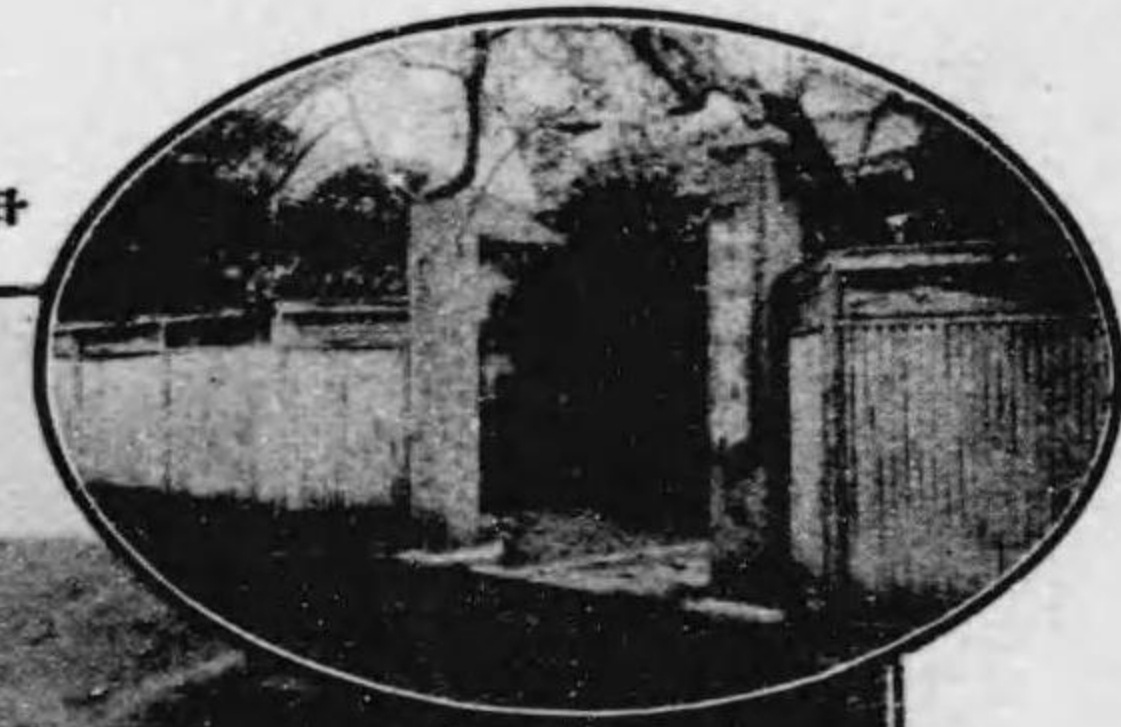


三原山の噴煙



大島婦人の参宮そり毛

伊東館正門及客室の一部



伊豆伊東玖須美温泉

# 伊東館

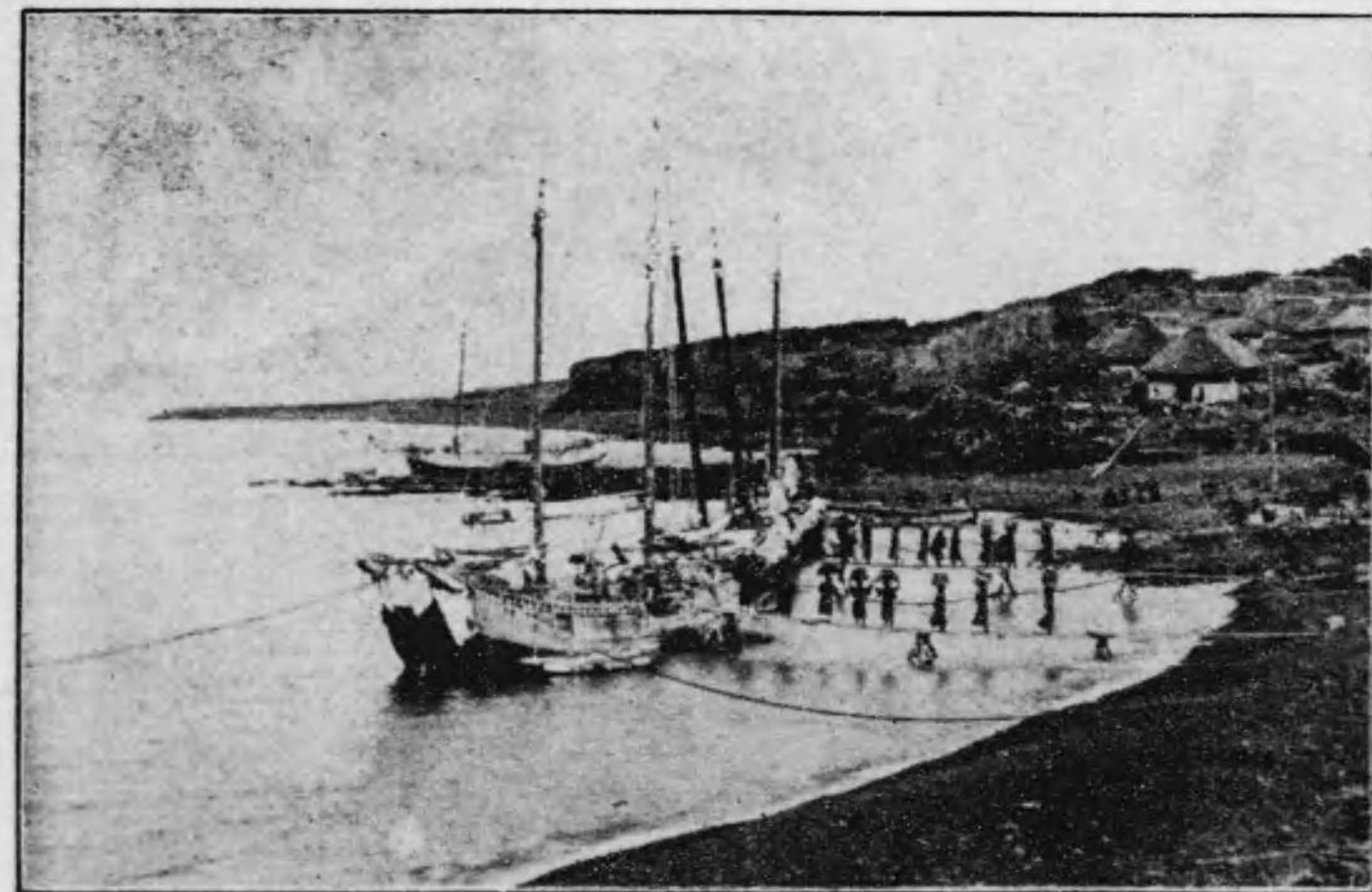
(電話伊東一七番)



露光量違いの為重複撮影



人婦汲水と港の浮波



景光の積薪岸海村元

毛養料の大王 純潔理想的の椿油

純粹島椿油

一、ヒノヤ椿油は新鮮純良なる植物性不乾油の模範にして毛髪の色澤を増し營養を補くる効果絶大なり

一、大島特産の椿の實を特に内地に取寄せ内外皮殻を除去し冷壓法に依て採收せるが故に遊離酸蛋白質分解物等による臭氣なし

一、水點下數度に冷却しバルミチン脂を分離せるを以て粘度最も低し

一、市販販賣の不完油と御比較の上此の眞に理想的の椿油の價値を認められんことを希ふ

處方調劑 洋酒 罐詰 洋食料染料 電機材料  
 醫料器械 化粧品 コールタ カッチ丹柄 ボイル油ベンキ

伊豆伊東町 須美 日野屋藥局

◎純粹島椿油發賣元

藥劑師 德永 靜馬

電話伊東二十四番 振替口座



人結汲水と港の浮波



景光の故新岸海村元

伊 東 温 泉

玖須美 河原 別莊

●位置

松川の清流を背後にしたる麥圃中にあり朝夕親しく遠近の山々を前にし四望尤閑靜なり

●特色

當初主人が自己の療養の爲め設けしなれば家族的なるを特色とす御希望なれば自炊も不苦

●浴室

温泉は庭内に湧出し當地有数の泉質なり、浴室は區畫止しく、宏壯清潔を主とせり、

●經費

家族的を目的としたれば諸君は自宅にあるが如き感あるべし、一切の冗費を要せず諸事低廉也、

伊 東 名 産

いちと羊羹 都 いちと

いちと餠 新製、ジウム餅

山葵羊羹 山葵もち

鑛泉せんべい 鑛泉餠

磯豆 温泉豆

伊東名菓調進處 玖須美



榮樂堂奥野

露光量違いの為重複撮影

伊東土産鴈皮紙布織

吳服太物洋織物一式  
帽子洋傘糸綿るい

季節向流行品

各種取揃有之尤も薄利多賣を以て御用相務め候間多少に  
不拘御用被仰付度奉願候

伊東町猪戸

命ひのや吳服店

振替口座貳貳八七〇番

弊館に滞在せられたる

大町桂月先生は

『孤島には

思ひもよらぬ

旅館也』と、

眞價は實見によりて

證明せらるるもの也



伊豆大島元村

三原館  
柳瀬勇次郎

露光量違いの為重複撮影

弊館に滞在せられたる

大町桂月先生は

『孤島には

思ひもよらぬ

旅館也』云々

眞價は實見によりて

證明せらるるもの也



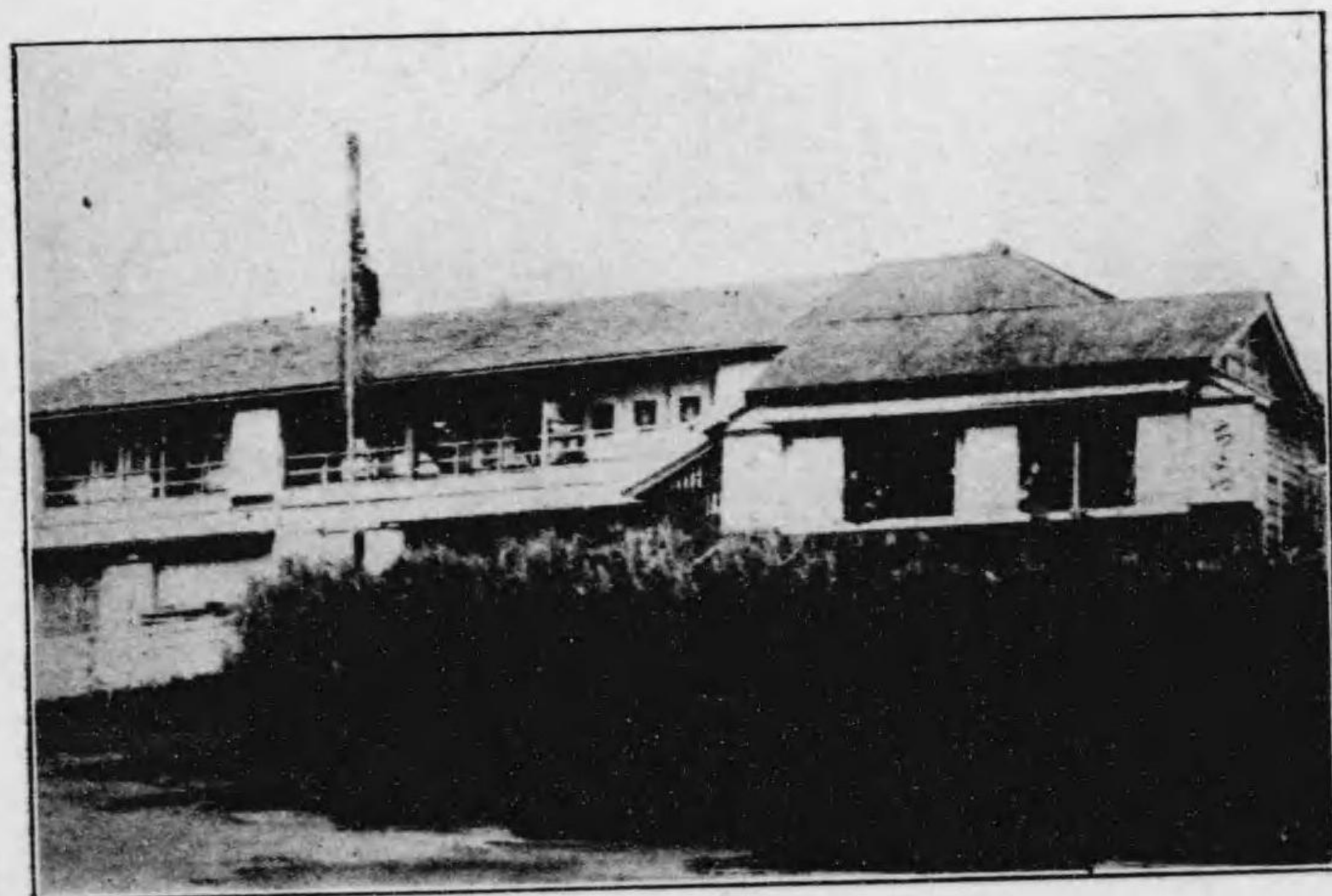
伊豆大島元村

三原館

柳瀬勇次郎

露光量違いの為重複撮影

調	御	御	客	眺
理	賄	取	室	望
新	低	扱	清	壯
鮮	廉	親	潔	快
		切		



伊豆大島元村

千代屋旅館

柳瀬政吉

# 大勉強温泉宿

内湯  
旅館

伊豆伊東町玖須美温泉場

松  
林  
館

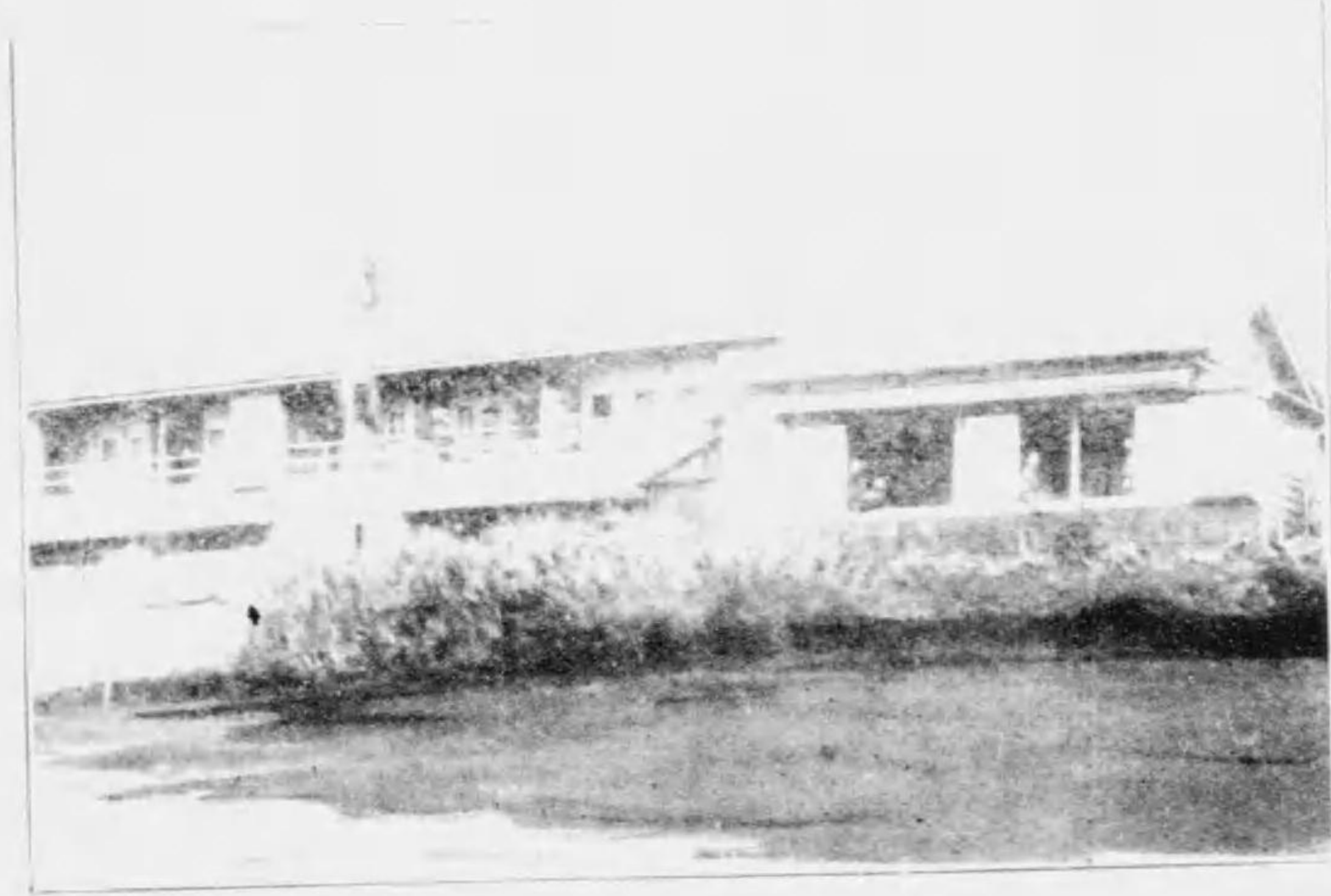
特電話四十五番

一本館ハ親切勉強ヲ旨トシ衛生ニ留意シ料理ハ新鮮ノ品ヲ撰ミテ調理シ浴費廉直ニ冗費ヲ節シ平民主義ヲ恪守ス  
一本館ハ至便ノ地利ヲ占メ佳絶ノ風光ヲ有シ大島渡航者其他汽船乗降客ノ便利ヲ計ルヲ特色トス

一本館滞在ノ浴客ハ屢麻質斯其他諸病ニ特效アル和田温泉ニ自由ニ入浴シ得ル便利アリ

一本館ハ玖須美海岸ノ海水浴場ニ最モ接近シ居レバ夏期海水浴及温泉浴ヲ兼ヌル方ニ至極便利ナリ

眺望 壯快  
客室 清潔  
御取扱 親切  
御貯 低廉  
調理 新鮮



伊豆大島元村

千代屋旅館

柳 瀬 政 吉

伊東町 須美温泉 櫻屋 櫻井龜吉

営業向

極めて懇切を旨とし最も経済的に御取扱可仕候  
御浴客様方の御便宜を計らんため離座敷望臺遊戯場の設備御座候

温泉 櫻屋 櫻井龜吉

特電伊東二十番

特色

學生方に對しては特に御便宜相計り申すべく各公私學校生徒諸君の御來遊を歓迎仕候

伊東土産調進所

大正 紀念 帝國製菓共進會出品に就き有功賞受領

- いちご羊羹
- こがねあめ
- いそまめ
- わさび羊羹
- 栗羊羹

右は弊店獨得の新案名菓にして滋養と風味とに富める最良の御土産品也

○大島椿油 發賣元

伊豆國伊東町須美湯ばた濱通り



蛭子屋總本店



### 伊東土産調進所

大正 紀念 帝國製菓共進會出品に就き有功賞受領

- いちご羊羹      ○こがねあめ
- いそまめ        ○わさび羊羹
- 栗羊羹

右は弊店獨得の新案名菓にして滋養と風味とに富める最良の御土産品也

○大島椿油發賣元

伊豆國伊東町玖須美湯ばた濱通り



## 蛭子屋總本店

### 伊井龜吉

伊東二十番

伊東に御便直相計り  
伊東生徒諸君の御來

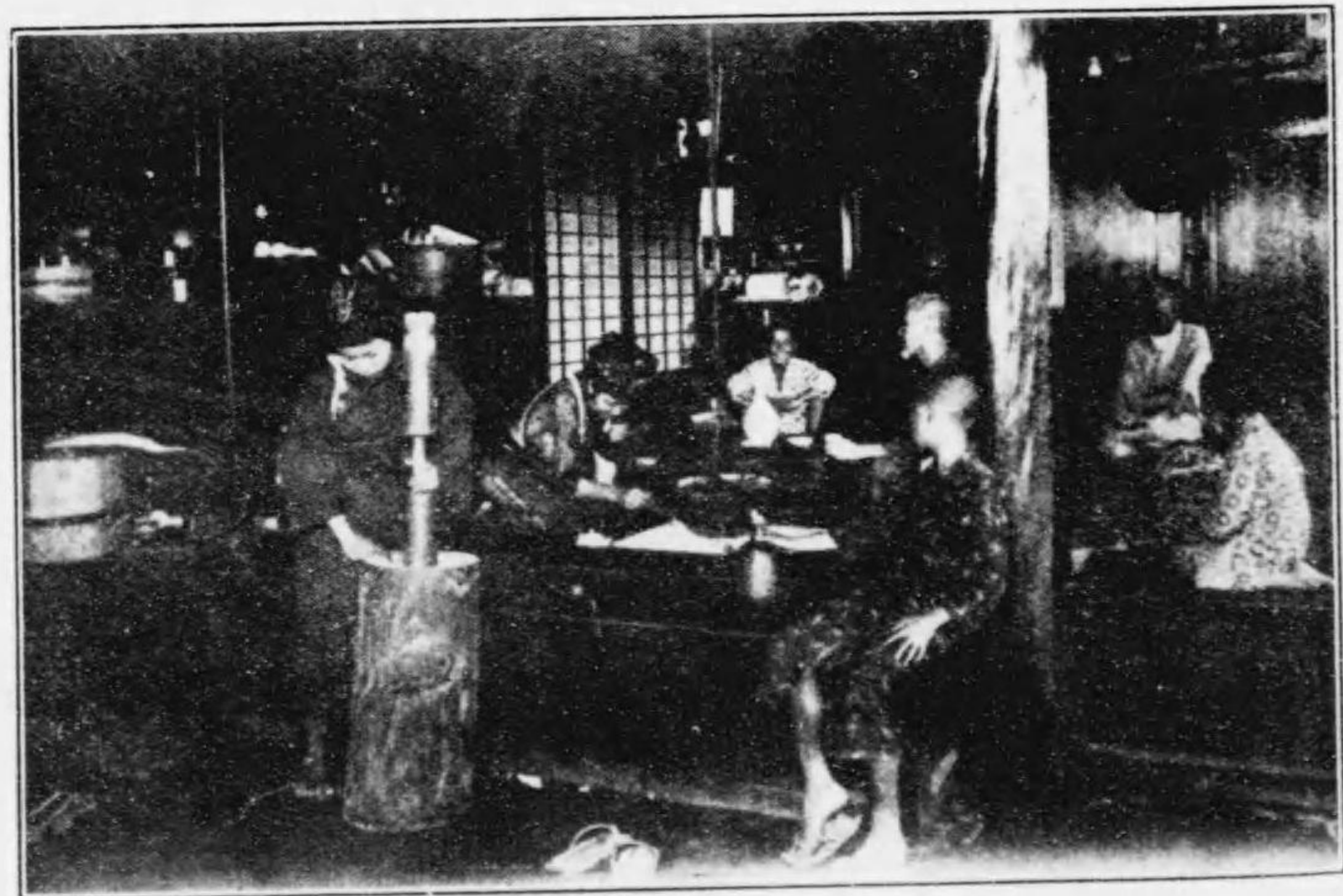
最も經濟的に御

御便直を計らんとす

の設備御座候



装盛人婦及列行者葬會島大



庭家の島大

伊豆伊東猪戸温泉場

▲弊館は土地高燥にして眺望の絶佳なるを以て名あり

高等  
旅館

湯本館  
芹澤

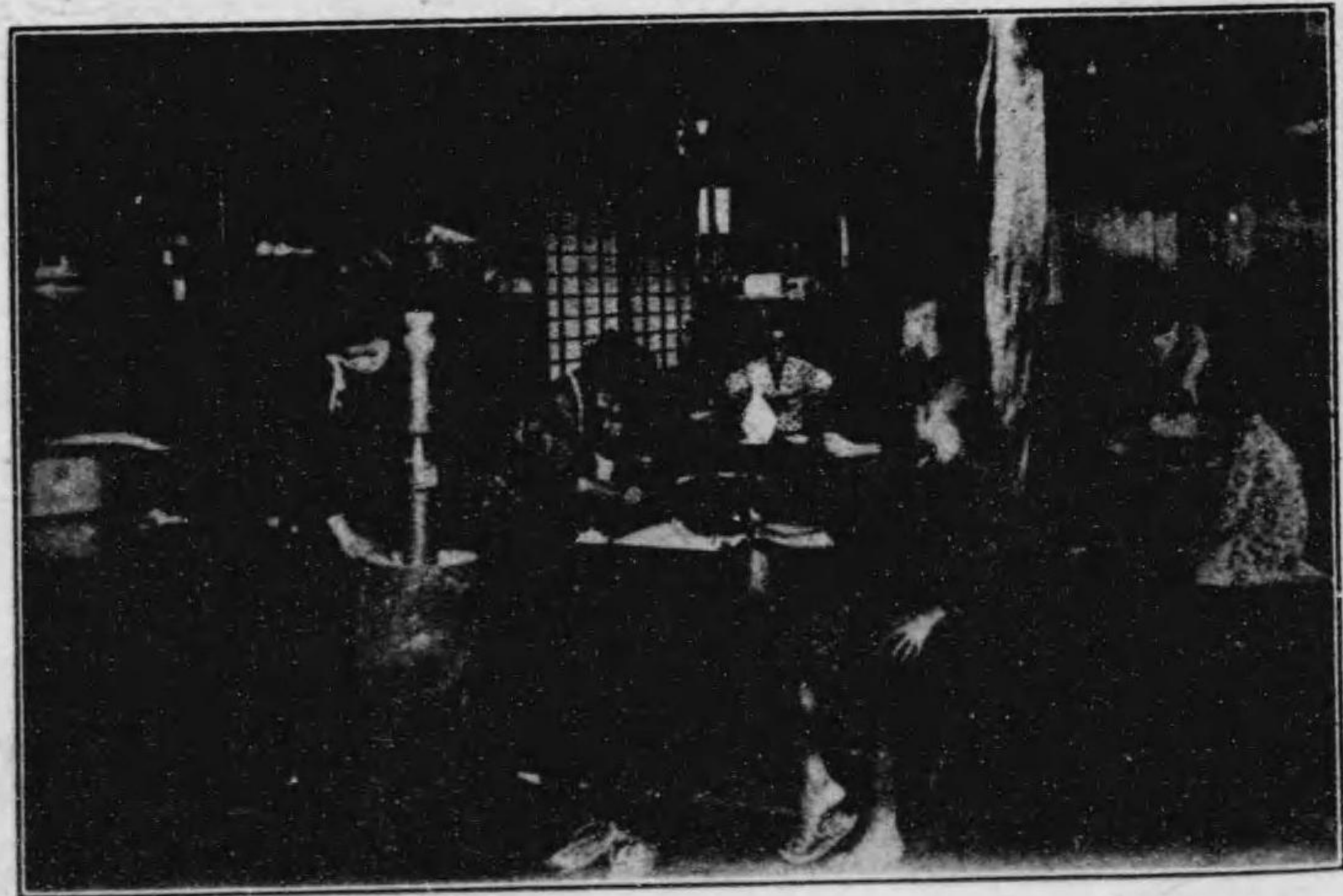
特電伊東四番

▲源泉三個所ありて胃腸レウマチス  
子宮病に特効あり

露光量違いの為重複撮影



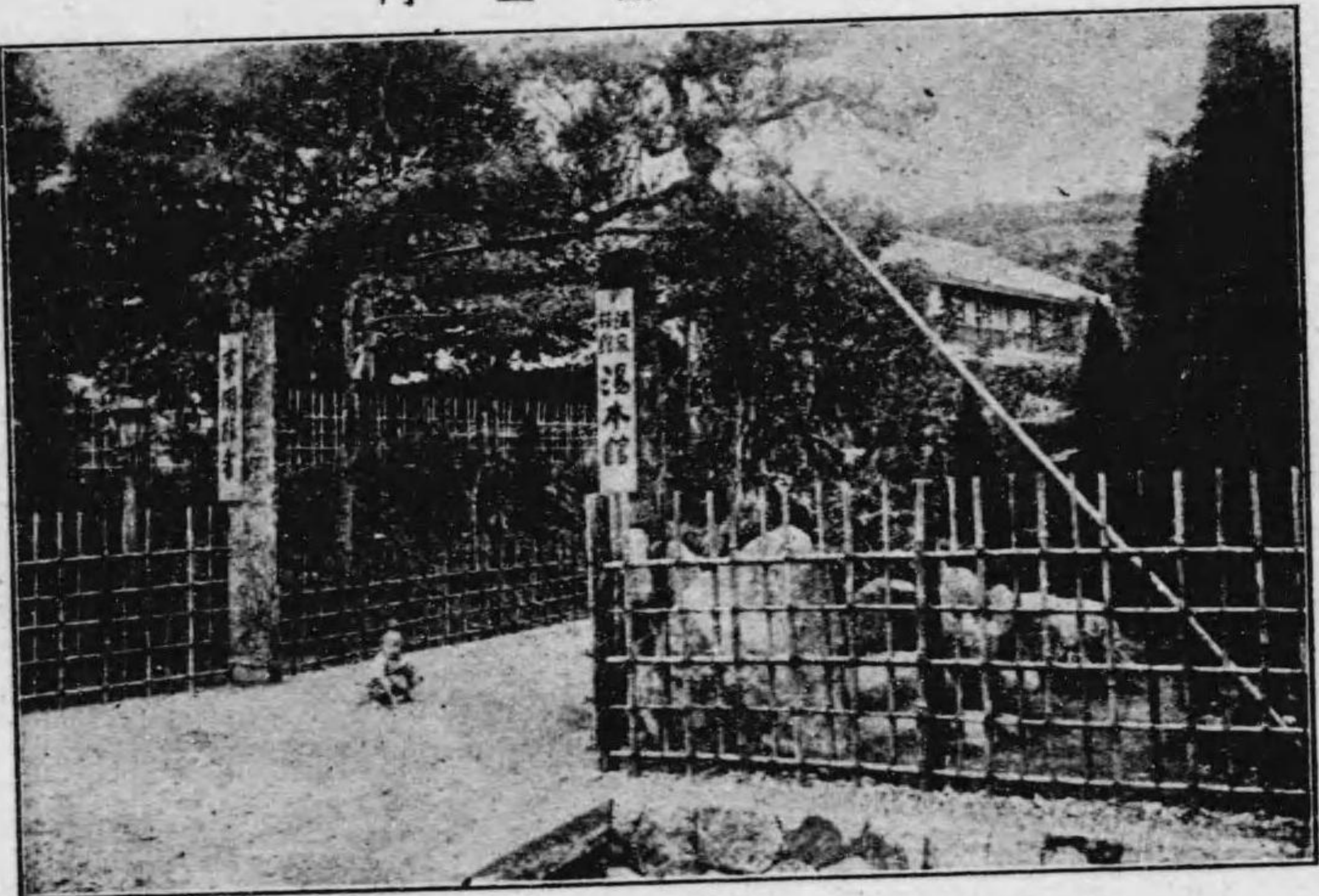
大島會葬者及盛人裝



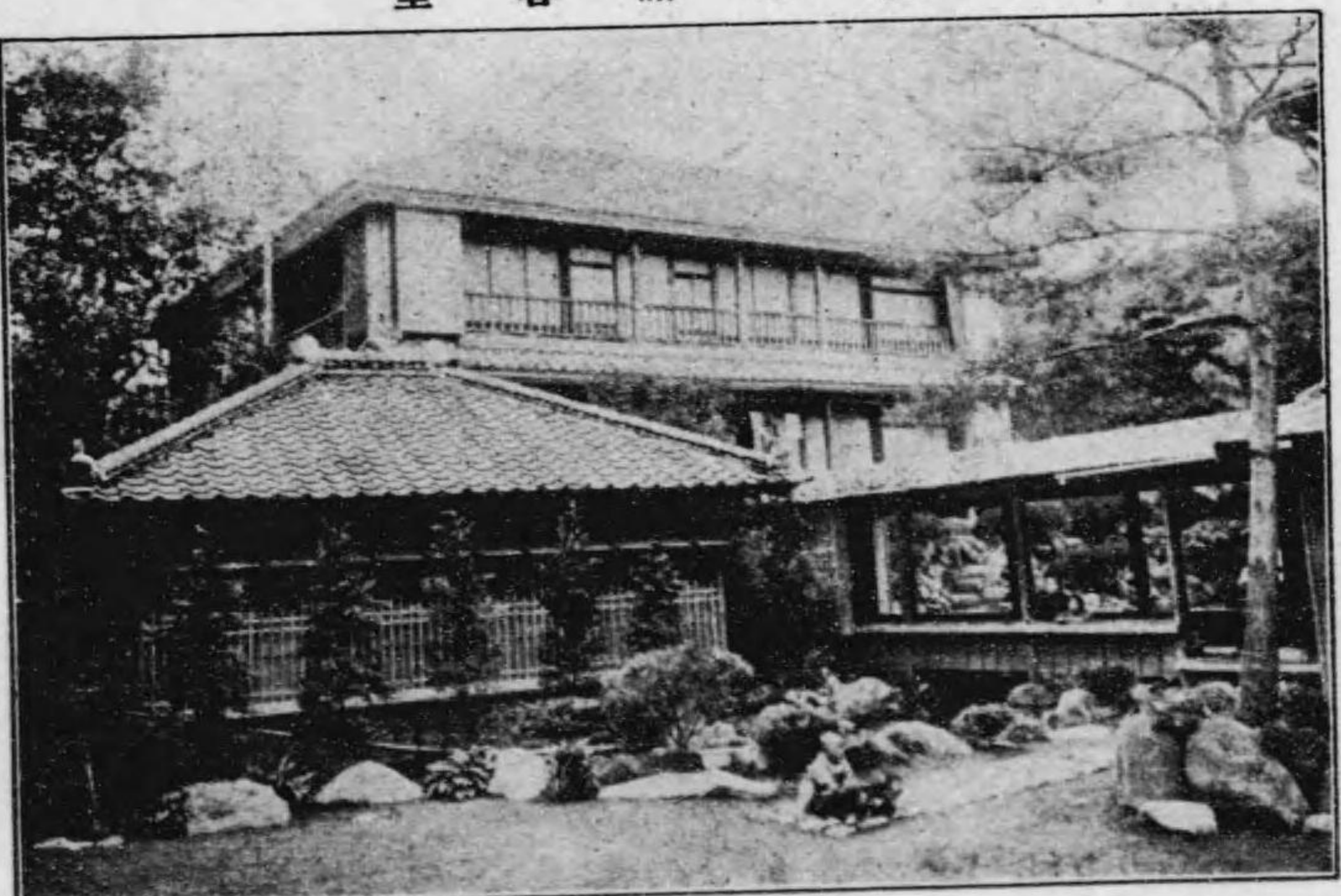
大島の家庭



伊豆伊東猪戸温泉場  
湯本館正門



湯本館客室



湯本館 芹澤 電話伊東四番

●源泉三ヶ所ありて胃腸レウマチ子宮病等に特効あり●

●弊館は土地高燥にして眺望絶佳なるを以て名あり●

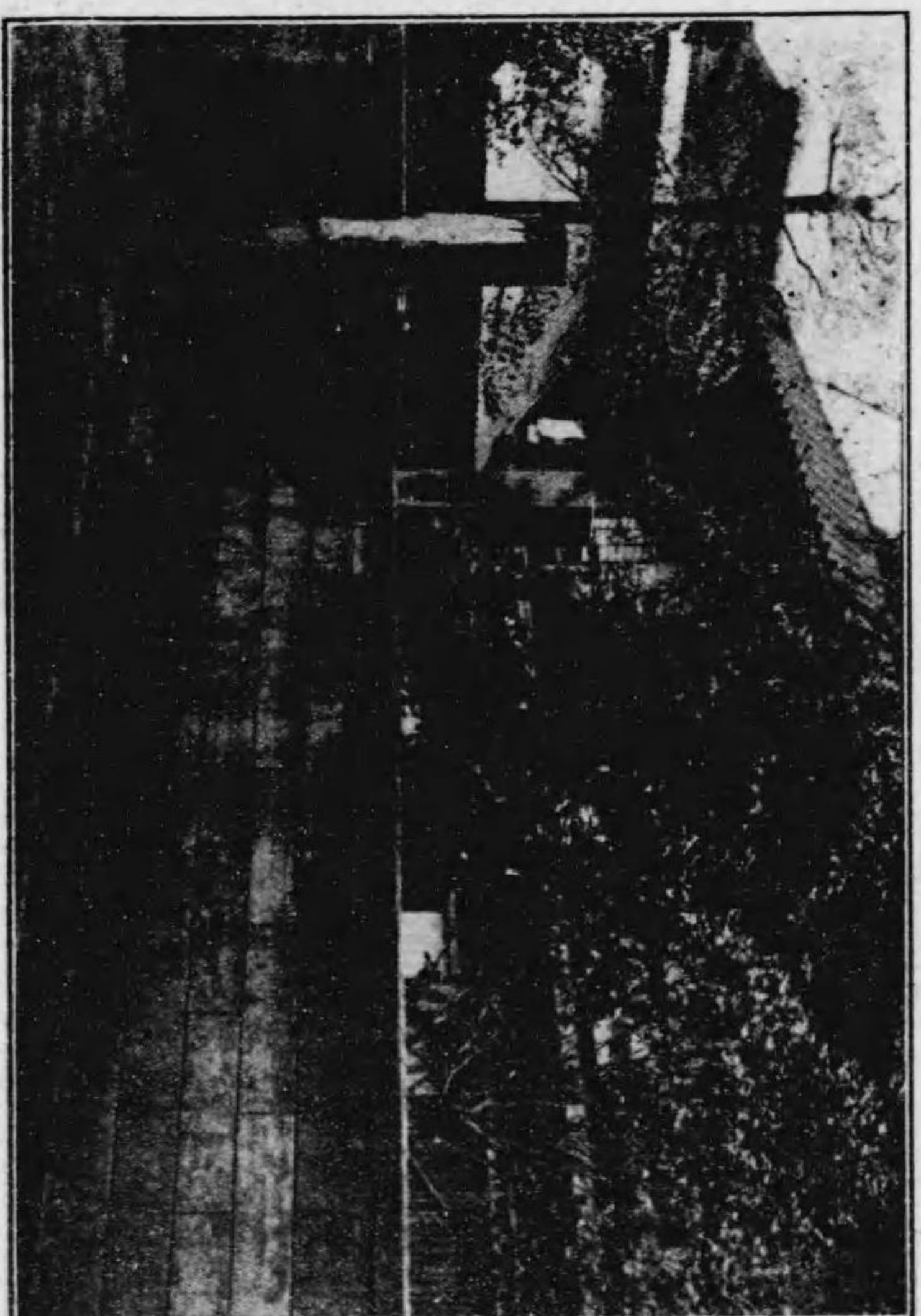
▲昔……りよ効顯の著しき温泉あり……▼

温泉旅館大坂屋

〔電話伊東二番〕

野惣兵衛

温泉美須玖



大坂屋正門

伊豆伊東

■浴室の増設御取扱鄭重なり……■

■御料理は主人が吟味精撰して調進す……■

▲……りよ直廉料宿御潔清は室浴……▼

露光量違いの為重複撮影

# 新館

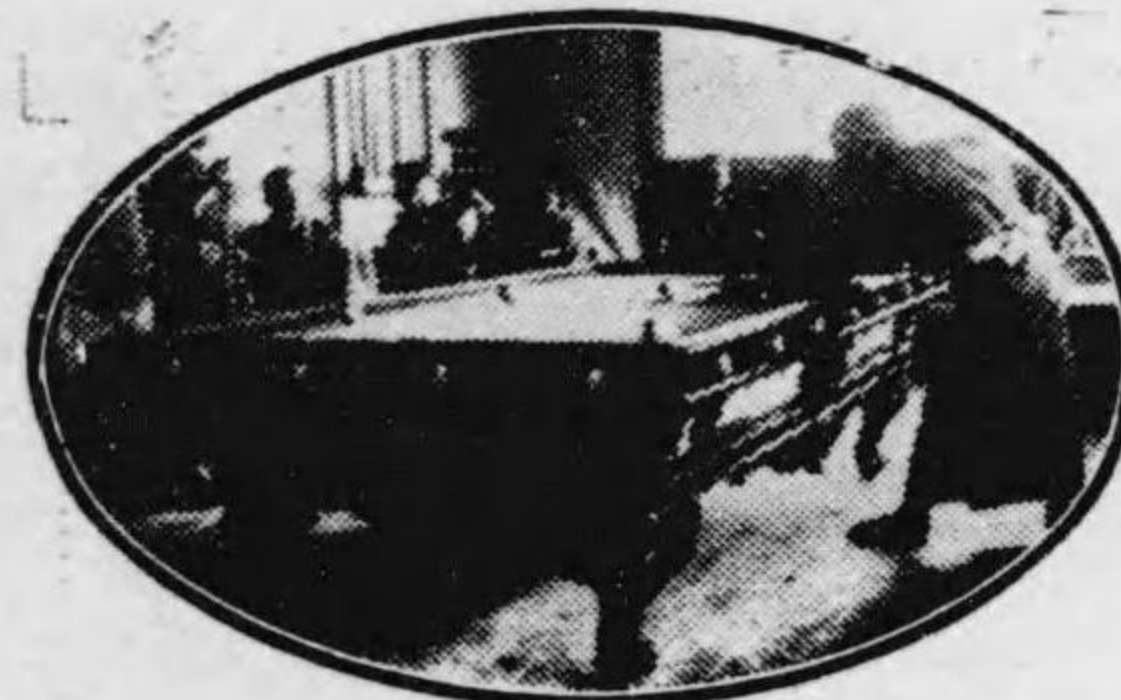
眺望 各室とも洗面所の  
佳絶 設け有之候

## 熱海 温泉

# 古屋旅館

内田市郎左衛門

電話熱海一六番  
振替東京一〇〇二〇番



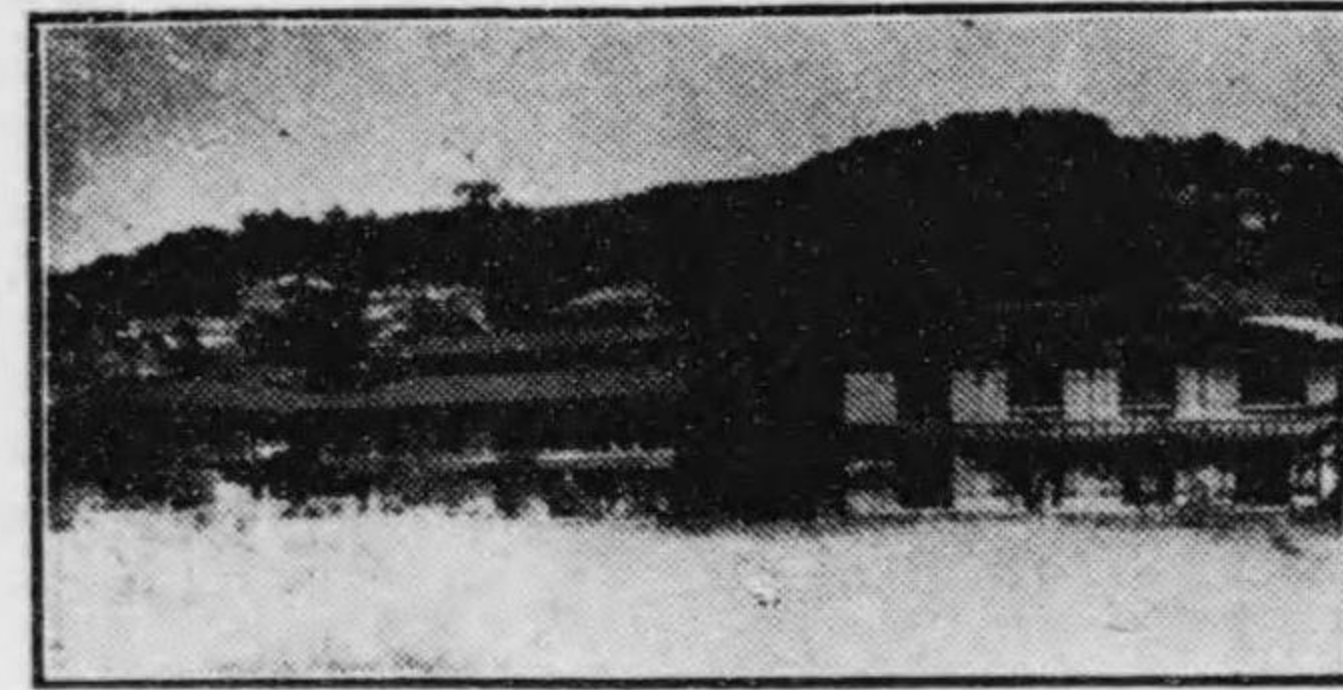
室戯球箱旅屋古

玉突場

球戯御隨意

圖書室演劇場の

設備も有之候



景全館旅屋古

露光量違いの為重複撮影

# 新館

眺望 各室にも洗面所の  
佳絶 設け有之候

熱海  
温泉

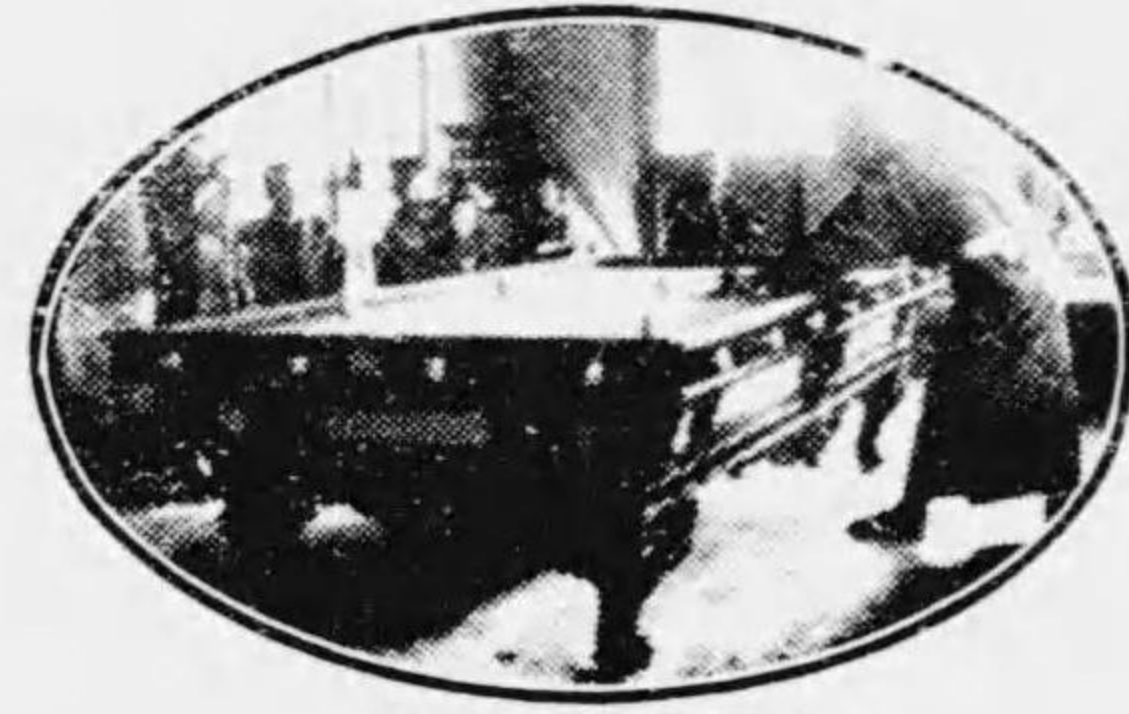
# 古屋旅館

内田市郎左衛門

電話熱海一六番  
振替東京一〇〇一〇番



景全館旅屋古



室戯球館旅屋古

玉突場  
球戯御隨意  
圖書室演劇場の  
設備も有之候

# 弊館ハ

伊東温泉場最高ノ位置ヲ占メ山海ノ眺望  
極メテ佳絶ナリ

伊東町猪戸温泉場

温泉  
旅館

# 東京館

特電伊東三十三番

# 弊館ハ

勉強ヲ旨トシ御浴客様方ノ御便利ニ御扱  
可申候

露光量違いの為重複撮影



瀨 怒 の 地 木 差



港 田 岡

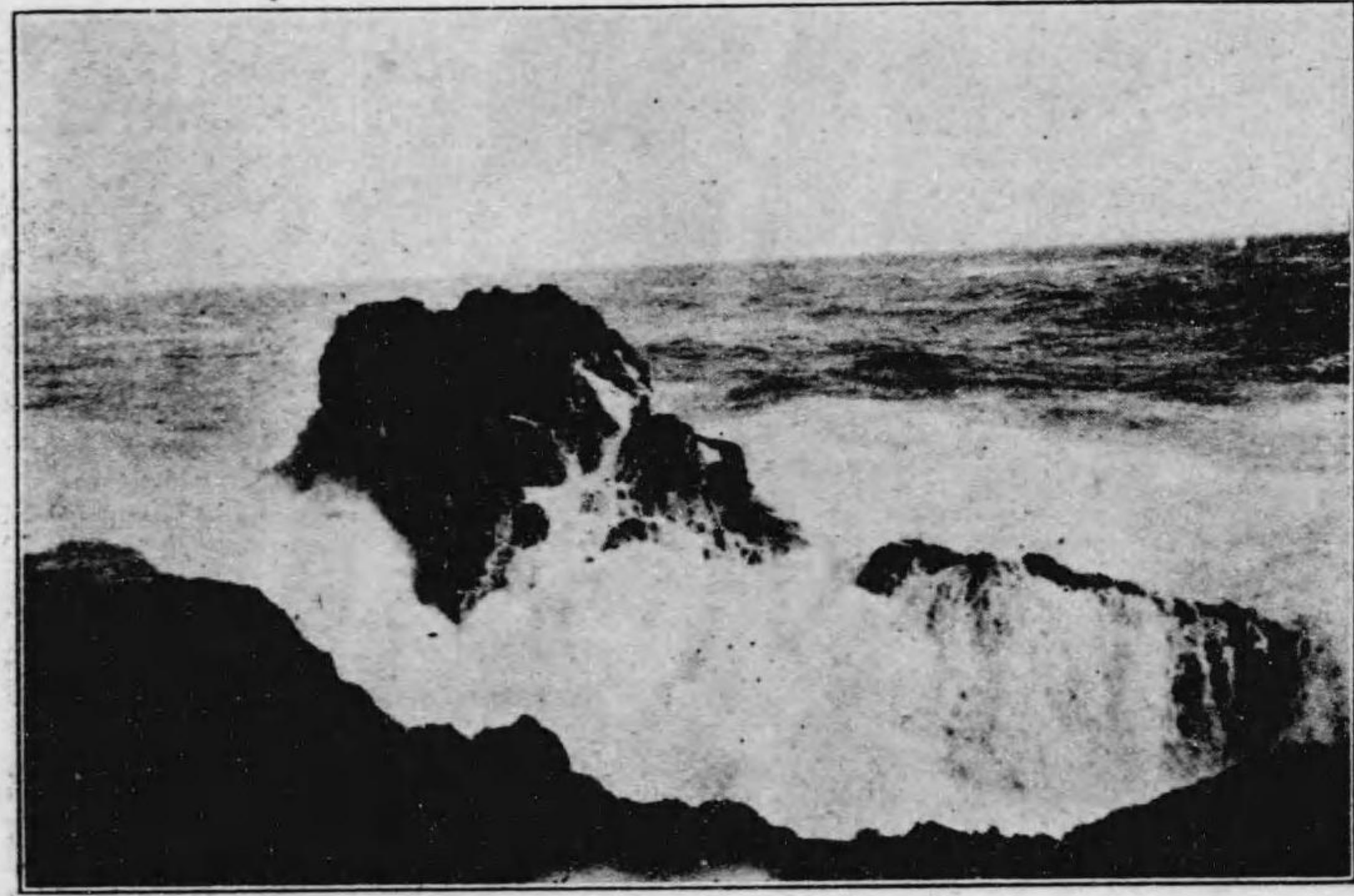
寫眞師

懸 川 南 陽

伊豆伊東町松原假寫眞場

**一館主** は「宮内省囑託寫眞師」丸木利陽氏の許に多年撮影技師たりし深き經驗を有するものに御座候  
**一出寫** は御一報次第道の遠近を問はず御希望の場所へ速かに參上可任伊東内は費用等一切申受けず候  
**一料金** は殆ど實費に近き價格を以て御需に可應當館の寫眞代が低廉なる理由は甚だ簡單明瞭なり即ち利益  
 本位にあらざるが故なり御參考寫眞種々取揃有り御散歩の折等は撮影の如何に拘はらず御立寄願上候

露光量違いの為重複撮影



差木地の怒濤



岡田港

南陽

南陽は、  
山陰地方の  
一邑にして、  
古くは、  
南陽郡と稱し、  
其の地、  
山陰の南に  
あり、故に  
南陽と稱す。





千ヶ崎を望む



大島の畜牛

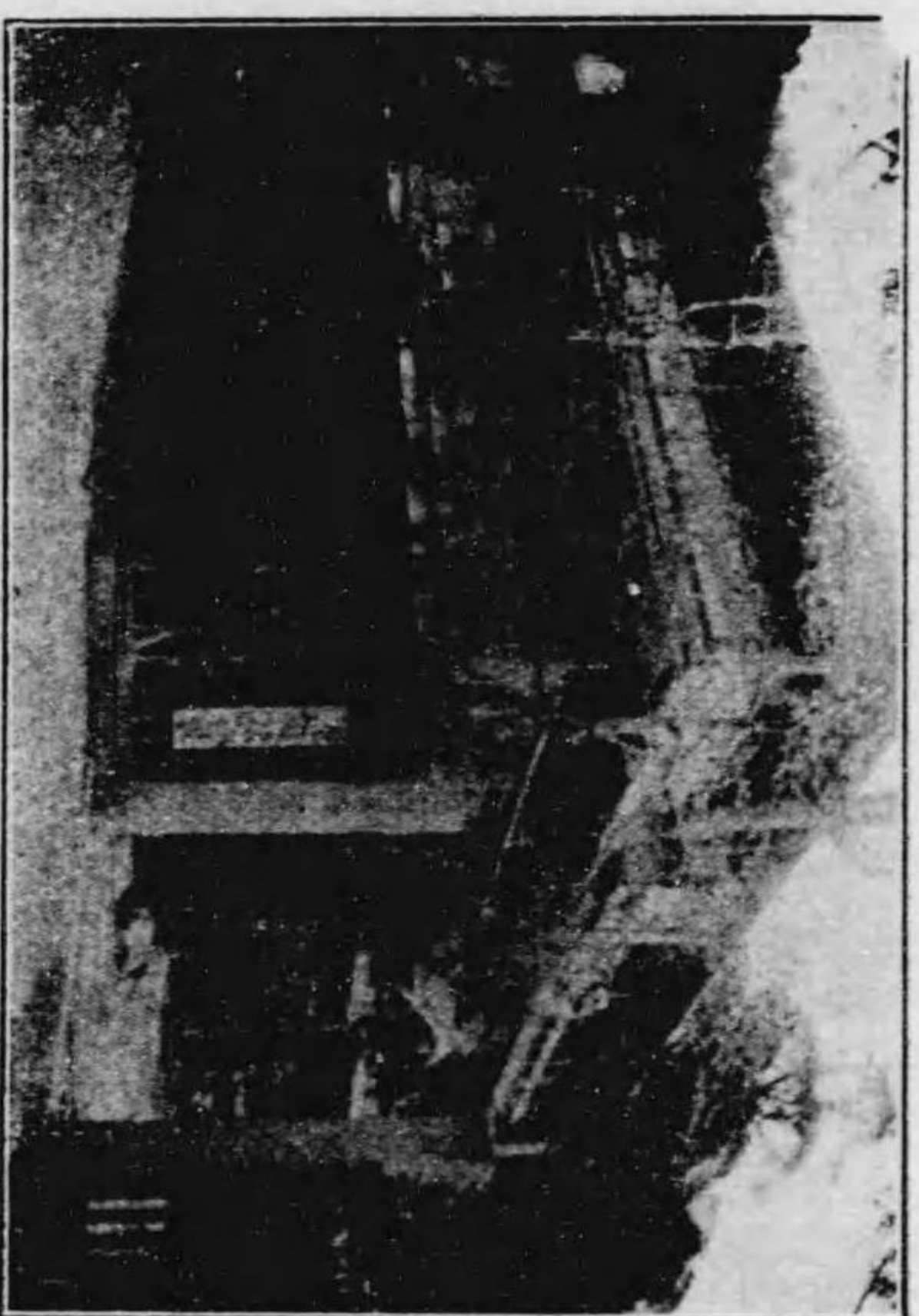
伊豆熱海大湯前

温泉旅館

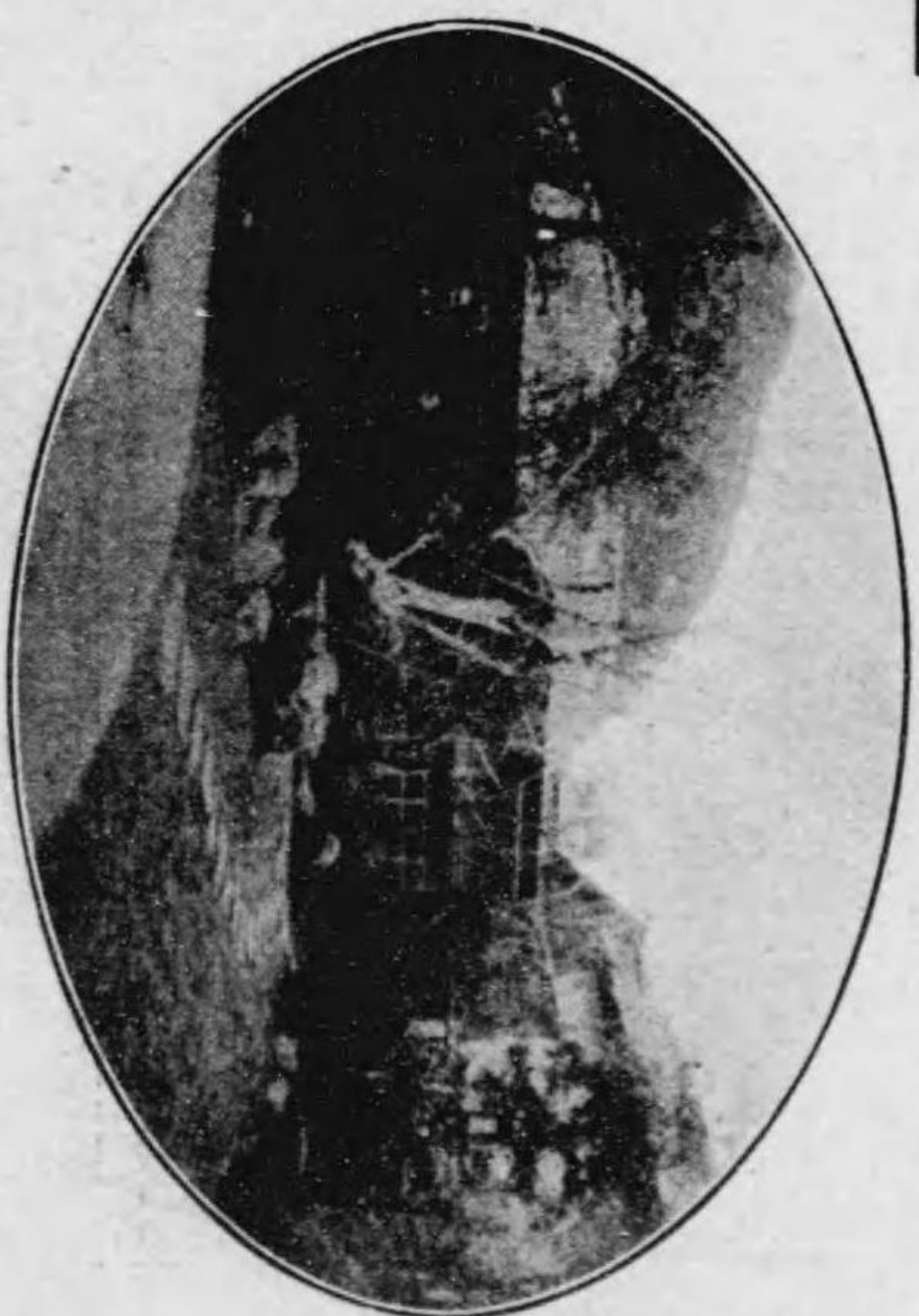
聽泉閣

# 玉久別莊

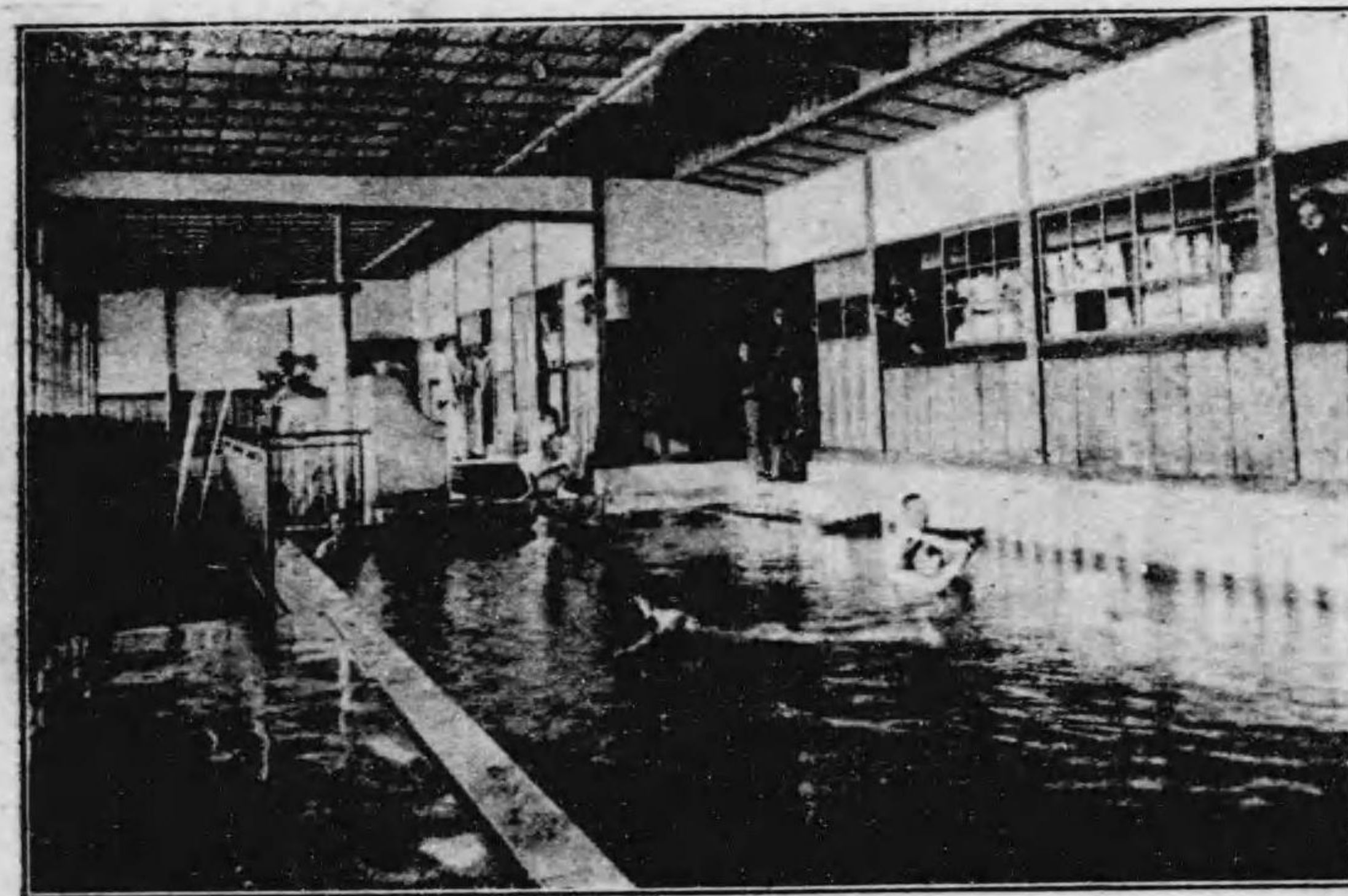
〔電話二〇番〕



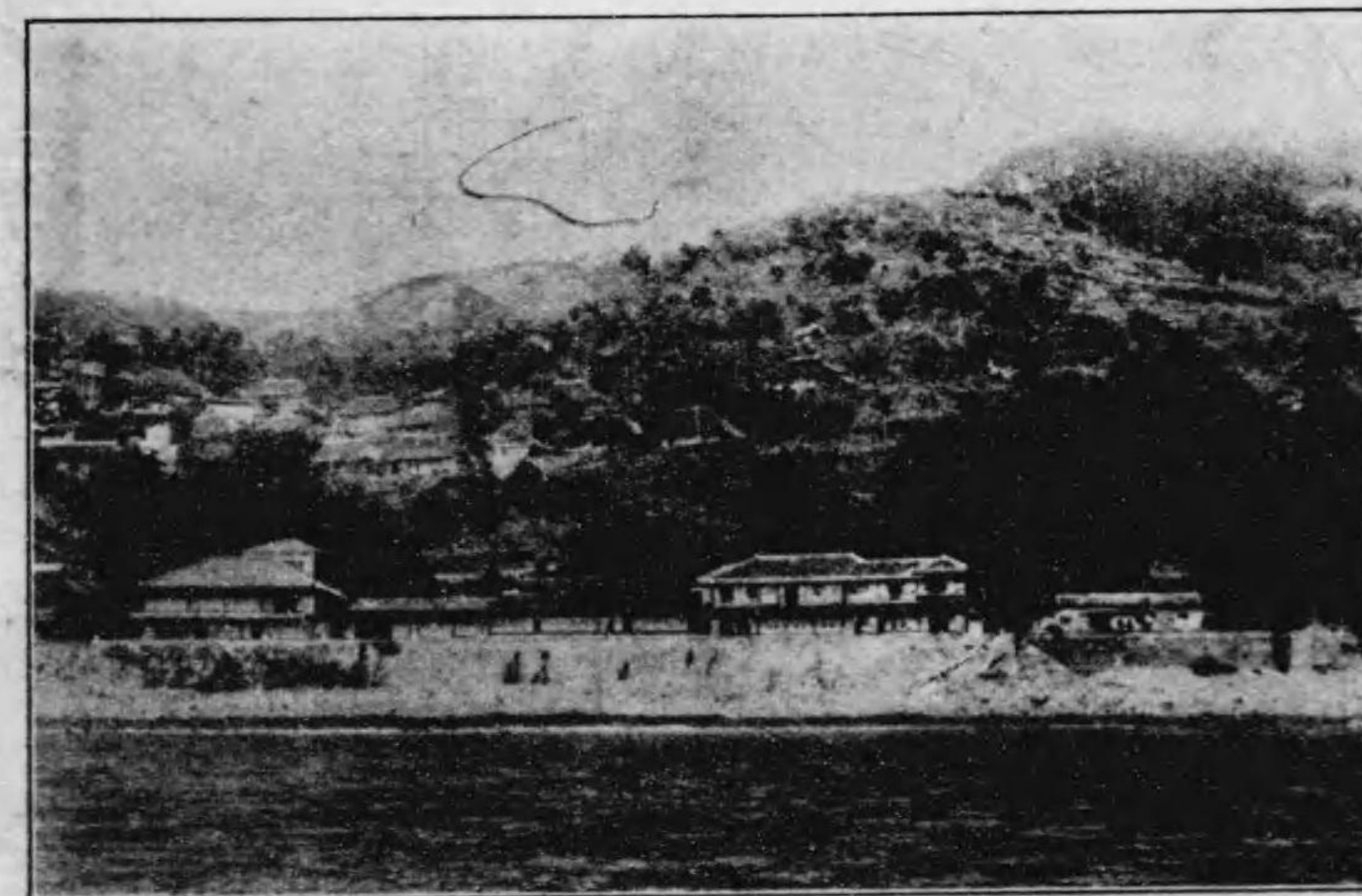
土地乾燥空氣清良にして山海の眺望極めて佳なり  
 新式の砂むし風呂は着衣のまま入室に便なり  
 四季とも醫治に特別あり



# 欠



伊豆山温泉相摸千人風呂全景



伊豆山温泉上海より見た千人風呂相摸全景

# 欠

## 伊豆大島

### 自序

「うらみのみ大島波のいかなれば、流るゝ人のまたもかへらぬ」とよみけむ、絶海の孤島、昔は慘憺たる流人の配處、今は俗塵あがらざる自然の仙境、古人が罪なくて配處の月を見ればやと言ひけむ雅趣を、酒間談笑裡に味ふことを得るも、時の然らしむる所也。

今でこそ、汽船も往復し、音信も自由なれ、昔はたやすくは得も渡りがたき島なりし也。されば役の小角が流竄せられて、鬼神を驅り、鎮西の八郎が配謫せられて、神仙に化せりと傳へらるるも亦此の島なりけり。殊に三千年前の古跡歴然として石器時代の遺物を存するよりいへば、所謂海中の博物館也。

轉じて自然の光景に接せんか、屹然として島の中央に聳立せる三原山巔、巖壁たる噴烟、天空に沖し、崇高壯大、人をして自ら畏敬の念、禁ずる能はざらしむ。殊に四

面環海の島地なれば、風光の明媚、眺望の爽快なることは、蓋し海中の別天地ならんか。  
 況んや、此仙境、此別天地に住する島民の淳朴にして、而も古代の遺風を存するをやあ、吾人苟もこの聖代に遭遇してその恩恵に浴するもの、曷ぞ一度渡航して此の仙境を探らざる。往け、淳朴敦厚なる同胞は優遇以て君を待たじ。探れ、壯快明媚なる山水は微笑以て君を迎へじ。茲に一書を編して渡島の便に供すと云爾。

大正三年六月

著者誌

### 伊豆大島

#### 緒言

- 一、本書は伊豆大島の別天地を紹介せんがため編述したるもの也。
- 一、本書は成るべく平易に簡明なる事を主とし、各方面に亘りて記載したるも、脱漏の嫌なき能はず。他日を期して訂正増補すべし。
- 一、本書は曩に著者が編述したる大島要覽の改訂にして、勉めて考證を明にし、記事の正確なるを旨としたり。
- 一、本書は文壇の泰斗として知られたる大町桂月先生が特に校閲の勞を執られ、細大となく指導を賜はりしのみならず、最近に渡島せられてもせられたる詩文を寄せられたるは著者の光榮とする所にして、茲に謹みて感謝の微衷を表す。
- 一、本書編纂に就き左記の諸書を参考したり。再訂の期までには、廣く涉獵せん考へ也。

伊豆七島誌、三宅島の産業、大島地理史談、伊豆新誌、事代主事蹟考、源平盛衰記  
 保元平治物語、椿説弓張月、三宅記、大島教育會報、伊豆半島、旅行案内、國史年  
 表、伊豆志、國史辭典、伊豆日記、南方海島志、風俗畫報、伊豆七島圖會。

大正三年六月

著者誌

### 伊豆大島目次

一、渡島ノススメ……………一頁  
 ▲伊豆半島より見たる大島 ▲爲朝の面影 ▲大島の歴史と風習 ▲三原火山と特色多き海中の別  
 天地

二、渡島ノ順路……………二頁  
 ▲先づ伊東へ ▲趣味多き道順 ▲國府津より海路 ▲東京より海路 ▲陸路伊東へ  
 ▲大島航路 ▲東京東大島間 ▲東京直航 ▲伊東大島間郵便航送船

三、風土上ヨリ見たる大島……………五頁  
 ▲位置 ▲形勢 ▲氣候

四、火山島トシテノ大島……………七頁  
 ▲成因 ▲三原火山 ▲噴火年曆 ▲火口内の模様 ▲寄生火山 ▲波浮港 ▲湯場

五、沿革上ヨリ見たる大島……………一二頁  
 ▲開創 ▲流竄地 ▲徳川幕府時代の島治 ▲明治聖代の島治 ▲現今島治一般 ▲人口戸數  
 ▲産業 ▲教育 ▲宗教 ▲衛生 ▲道路

六、傳説ニ富メル大島……………二八頁

- ▲島作りの傳説 ▲日忌の傳説 ▲爲朝弓張月物語 一島人を威服す 二紙鳶揚の悲劇 三末路
- ▲おたい明神の由來

七、風習上ヨリ見タル大島……………四〇頁

- ▲島民生活の模様 ▲人情 ▲婦女の容姿 ▲衣服 ▲衣物 ▲家屋 ▲貯水法 ▲言語 ▲婚儀
- ▲葬儀 ▲年中行事 ▲祭典

八、遊覧案内……………四七頁

元 村

- ▲概説 ▲吉谷神社 ▲醫王山金光寺 ▲祭昌山海中寺 ▲海照山潮音寺 ▲島農事試験所
- ▲種牛飼育所 ▲大島煉乳株式會社 ▲爲朝の館址 ▲爲朝刀を研いだ跡 ▲愛宕山
- 野増村
- ▲概説 ▲大宮神社 ▲野増小學校 ▲風穴 ▲千波崎 ▲石器時代の遺蹟 ▲間伏 ▲佐野濱 ▲噴火の慘害 ▲三原山 ▲三原神社
- 若木地村
- ▲概説 ▲風光
- 波浮港村

- ▲概説 ▲海軍貯炭所 ▲無線電望樓 ▲波布比賣神社

泉津村

- ▲概説 ▲秋の濱 ▲波治加麻神社 ▲石のそり橋 ▲櫻株 ▲行者窟 ▲日忌祭

岡田村

- ▲概説 ▲乳ヶ崎 ▲湯場 ▲沿革 ▲八幡神社 ▲龍王神社 ▲福壽庵

九、詩歌ト趣味アル大島節……………五八頁

- ▲古人の詠じた詩歌 ▲近作のもの ▲大島節

十、名 産……………六五頁

- ▲椿油 ▲牛酪 ▲薪炭

十一、旅館案内……………六六頁

附 録

大島紀行 二篇……………一一一八頁

- ▲火を噴く島
- ▲配所の月

# 伊豆大島

文學士 大町桂月校閱

齋藤和堂著述

## 一、渡島ノススメ

伊豆半島東海岸の洋上遙かに臥牛の海中に蹲踞する如く、大鯨の波間に游泳するが如き島影を認める。これを伊豆七島中の盟主大島なるである。濛々として天空に漲るは三原火山の噴烟で、世に所謂御神火とはこれだ。

伊豆大島といへば直ちに鎮西八郎爲朝を想ひ起す。保元の亂時利あらず、罪せられて此の島に配流せられた英雄八郎。もとより徒らに空しく過すべき筈なし、大島櫻の咲き匂ふやうに、英氣一たび發すれば、威武四隣に振ひ、忽ちに覇を海島にとのふるに至つた。然るに惜しいかな。櫻花爛漫たる時は、ただ一瞬のつかの間、あはれや、伊豆の嵐は天城の山巔より吹荒びて、稀代の英雄も花の如く散失せたるは昔語、島人が

三原山の御神火の如く今尚畏敬する爲朝が名残を止むるの地は此處である 往いて其面影を忍ぶも亦奇。

此の島、神代にあつては、事代主命の妃波浮姫命が住まはれ、上古にいたつては、咒術の行者役小角が誦せられた。さればその開拓の歴史頗る遠く三千年の遺蹟歴然たるものがある。従つて言語風俗習俗等も内地と異つた古代の遺風を傳へてゐる。それ故山野を跋涉して古蹟を訪ね、島人と談笑して風習を知るも頗る妙。

島の中央に聳ゆる三原火山は、火山研究の好資料、四面を繞れる海洋は、魚族豊富の無盡藏、壯大明媚な洋上の風光は矚目思はず快哉を叫ばしめ、文士は詩囊を豊にし、畫家は畫材を充たすことが出来る。殊に空氣の清新なる、氣候の温暖なる、島民の淳朴なる、牛乳の豊富なる、環境の閑靜なる、閑暇を利用して一度は渡航すべき海中の別天地である。

### 二、渡島ノ順路

大島へ渡るには先づ伊豆伊東温泉場へ。伊東への道順は次の通り。

#### 一、熱海温泉場から

趣味多き旅行をなさうなら、先づ國府津迄汽車にて、それより小田原、伊豆山、熱海と相模の沿岸より伊豆の東海岸に出づるか、箱根路より熱海に出づるか、何れも風景絶佳なることは天下一品である。とにかく間歇泉に名高い熱海を経て伊東に出らるるがよい。熱海伊東間は陸路にて五里、三里は平坦砥の如き新道。二里は峠、汽船は午前五時三十分と午後二時との二回。航程約二時間乗船賃金五拾錢。

#### 二、國府津より海路—東京灣汽船會社航路

正午國府津出帆。小田原、熱海、網代、寄港して午後三時三十分伊東着、乗船賃金壹圓。

#### 三、東京より海路—東京灣汽船會社航路

毎日午後九時東京靈岸島出帆。翌日午前五時三十分熱海を経て、午前八時二



四、陸路

十分伊東着。東京熱海間乗船賃金九拾錢、東京伊東間乗船賃金壹圓貳拾錢  
東海道線にて三島驛迄、それから伊豆線に乗換へて、大仁驛に下車し、直ちに馬車を驅つて、伊東に赴くのである。

大島航路 東京灣汽船會社定期航路

一、東京、伊東、大島各港間毎月六回

東京を 三日、十三日、二十三日  
伊東を 八日、十八日、二十八日 午後六時出帆

伊東を 四日、十四日、二十四日  
大島岡田村元村波浮港に到り其日の正午更に波浮港を出帆元村岡田村を経て伊東に寄港して東京に歸る。

二、東京より直航して大島各港を巡航して東京に歸るもの、毎月二回 二十一日午後七時出帆、翌朝大島に着、岡田元村波浮港に寄航し、二十二日午後一時波浮港出帆元村岡田村を経て翌朝午前四時東京に歸航する。

- 三、東京、大島、三宅島間毎月一回 十一日東京六時出帆、十二日八時大島元村着更に三宅島に向ふ。十五日午後五時大島元村出帆、翌朝午前五時東京へ歸る。
- 四、東京、大島、神津島間毎月三回 五日、十五日 午後六時東京發、翌朝午前八時大島元村同十時頃波浮港、それより利島（二十五日のみ寄航）新島を経て神津島に向ふ。 七日、十七日 午後二時頃波浮港、午前六時元村を経て東京に歸る。

乗船賃金 伊東大島間金六十錢 東京大島間金壹圓五十錢

伊東大島長郵便航送船

毎日大島伊東間を石油發動機船にて往復する乗客と荷物の便宜を計り、各港へ寄港することは自由にて、賃金六十錢、約二時三十分間にて大島に達する故に、壯快なる海上旅行をなすことが出来る。

三、風土上ヨリ見タル大島

位置 伊豆半島の東南に連なつて點在せる伊豆七島中最も半島に近く、且つ大なるが故に其名を呼ばれる。東京から六十四海里の南、伊東より二十二海里の東南、洋中に孤懸してゐる。經緯度を示せば北緯三十四度四十分二十七秒より同四十七分四十四秒に至り、東經百二十九度二十一分五十一秒より同二十七分一秒に亘る地點を占めてゐる。

形勢 形状も紡錘の如く、南北に長く東西に狭い。其西北端乳ヶ崎より東南端波浮港龍王崎迄は殆ど四里、東西幅廣き所にて二里餘ある。島を一週すれば十二里餘、面積は約七方里である。

此の島は元來富士火山脈の迸發によつて成立した火山島であるから、高峰の三原火山は中央に屹立し二子、丘ノ平、愛宕、三峰、大平等の諸山が重疊して聳えてゐるから、平地はいたつて乏しい、各村落は其麓の海岸に沿つて散在し、海岸は概して巖礁起伏唯西部元村の地に稍々平曠の砂濱がある。東南端舊火口湖たる波浮の港は本島唯一の良港である。

氣候 は所謂海洋的で殊に暖潮黒瀬川の影響を受けて溫和である。冬季酷寒の候とても華氏四十度を下ることはなく、夏季炎暑の候とても九十度に上ることはない。年内平均温度六十度内外である。風は冬は北風が多く、西風は之に次ぎ、春末から南風加はり、夏は南風及西南風が多い、降雨は四五月及九月に多く冬と夏は晴天が多い降雪は殆ど稀で積雪寸餘に及ぶことはない。

#### 四、火山島トシテノ大島

成因 富士火山帯に屬し、火山迸發に因つて洋底から噴出して成立つた火山島である富士火山帯の本脈は伊豆七島の八丈島から御倉、三宅、新島より伊豆半島の天城山に至り北の愛鷹山に連なるのである。大島は其支脈とも見るべきもので、大島から伊豆の熱海を経て箱根火山に續いて居る。そして利島を介して本脈の新島に連接し其の餘勢は延いて神津島に及んで居る。

三原火山は成層火山の好標本で海拔七百五十米突、中央に高く天空を摩し、多くの寄

生火山は其周圍にある。ヨセの外輪山は首峰を取巻いて、内側に廣漠たる砂原を形成してゐる。この砂原が舊噴火口で直徑二千四百米突、所謂火口原で外輪山は舊火口壁である。現今の火口丘たる三原の主峰は火口原を抜くこと百七十米突、傾斜頗る急峻で美事なる圓錐形である。轟々たる鳴動と濛々たる噴烟とは崇高壯大の感、自ら人に迫るを覺え、まことに壯觀なものだ。ことに東側の絶壁に臨めば地層整然と重つて、成層火山の特徴が現れて立派なものだ。

西端外輪壁に立ち火口原を望めば、茫漠たる噴灰中に奇岩怪石の跪坐倒立する有様は如何にも面白う。

嘗て理學博士中村清二先生が大島にて講演せられた説話に三原火山のことが詳述せられてあるから次に採録した。(大島教育會報所載)

(前略) 偕て此の火口は深さが約百メートルで、底は先づ平といふてもよい。火口内の委しいことは後に述べるが絶壁の上から見下して直に知ることが出来る稍々南方に偏して烟の出る穴即ち火井がある。其口徑は約百六十メートルある。火井の西側

に一つの小山があるが之れは明治九年の年末の噴火の時に出来たもので、此の時に獨逸の學者のナウマン氏が、英國のミルン氏と我國の和田維四郎博士等と踏査せられたのであるから、我輩は私に之をナウマン山と命名した。此名を諸君に紹介して御用ひにならんことを希望いたします。三原山と外輪山との間にある火口原は様々になつてゐる、即ち西側は砂原で、平坦であるが、東北側は熔岩起伏して、海濱に達してゐるそして、其裾は行者窟のある絶壁で遮られて二つに分れ、一はシン山に、他はトーフジマに流れ出て居る。火口原の南方にも亦一の熔岩が流れて居つて之はサナ濱に達して居る。

本島の成因に就いては、地質學の説を聞くより外はない。地質學者は、岩石の化學分析をなし、又地勢を考へて土地の新古を定めるが、其他地質學者の説では、大島の中で古い所は、乳ヶ崎から岡田邊に至る一帯の地で、其他は比較的新しい土地である。それで太古の状態を想像すると、歴史前の太古には恰度今日のサントリン島の如き海中火山で、山の大部分は水中にあつて、唯周圍の高い所許りが海面上に現はれて、弦

形をなして居たと考へられる。之がナウマン氏の説く所である。又一説には岡田村の北方の海中に噴火口を有して居たものだといふのもある。兎に角、其様な古い時代があつて其後に外輪山を爲す所の、島の大部分が成生したものに相違あるまい。それとても、一度の噴火で生じたものではなくして、噴火を幾度となく繰返して出来たものであらう。野増村の龍の口の遺跡は、人類學者の説く所では、三千年前のものならんといひ、同村北側の船敷の澤にある遺跡は餘程後の時代のものであるといふが、此等を見ても噴火が數十度となくあつたことが知れる。

三原噴火の歴史は、有史以前の事は勿論不明だが、其後の者を調べると、最も古いのは日本記にある。

天武天皇十三甲申年壬辰十月十四日は夕有鳴聲一如鼓聞于東方有入曰伊豆島西北二面自然增益三百餘丈、更爲一島、則如鼓者、神造是島響也。

といふので、是は西暦六百八十四年で今から約一千二百年前の出来事である。我國の歴史で伊豆島といふは大抵の場合に大島のことであるから、此の記事も三原山の噴火

であらう。そして、元村とか野増村とかいふ地名は之から起つたのであらうと説く人もある。次には續日本記にある仁明天皇承和五年（西暦八百三十八年）の記事で

承和五年秋七月癸酉、有物如粉、從天散零、蓬雨不銷、或降或止。

同年九月甲申從七月一至今月、河内三河遠江駿河伊豆甲斐武藏上總美濃飛彈信濃越前加賀越中播磨紀伊等十六國一々相續言、有物如灰、從天而雨、累日不止、但雖似三惟異、無有損害、今茲畿内道俱是豐稔、五穀僧賤、老農名此物、米華云。

とある。大島と明言してはないが、此年に富士や淺間が、噴火したのでないことは確かであるから、蓋し、大島の噴火であらう。小鹿島氏は日本災異忌中に、之を大島の噴火として記入してあるが予も同感である。其次には鳥羽天皇の安永三年（西暦千二百十二年）に大噴火があつたらしい、中臣宗忠卿の日記の中右記に曰く、

大永三年十月二十二日、從一昨日、東方有鳴動聲、其響如打太鼓、衆人驚異、不知何所。

同二十三日天晴日時許大鳴動、世間驚恐極、是何徵哉。

同二十四日右につき殿中に於いて御祈行はせらるべき評定の記事あり。長文につき略之。

十一月二日天晴、巳時許、大有二鳴動聲一。如我頭響一。大略天之所爲歟。非東國山聲歟。甚不心得心事也。

十一月二十七日（御祈を行はれし記事あり略之其次に）伊豆國解云、去月十月中下旬之比、海上火出来、鳴動如雷者、是去月天下鳴動大略此響歟、希有怪第一之事也とある。即ち伊豆の海上に起り變事の爲に其響が京都まで聞へたものである。是も判然と大島の噴火とは記してないが、多分大島のであらう。今此所て一つ物理學上の想像をして見ると、大島で起つた變動が如何程のものであれば、其音が京都まで聞えるであらうかと考へると、彼の磐梯山の破裂、南洋クラカタア島の破裂等から推算すると、大島では約直徑一千メートル位のもが吹き飛ばされたとしなければ其音が恰度京都まで聞えるといふ譯に行かぬ。偕て外輪山のヨセノ腰の形を見ると、泉津方面へ流れて居る熔岩流のある方の北側が缺けて居るから恰度馬蹄形をして居る。然るにこ

のヨセノ腰は鏡端より北の方の所でチヨット急に曲がつて一角をなして居る。福地、佐藤兩學士は之は外輪山が或時此方面で爆發破壊せられて、此の一角をなしたので、此の爆發火口は直徑が一千乃至二千メートルあると説き、其後火口の上に熔岩が流れて来て之を蔽ひ隠したのであるといふて居る。それで私も其説に賛成して尙上の計算からして中右記にある記事は此の爆發火口を成生した時のものであるといふ一説も附加提出して置く。

次の噴火は應永、慶長、寛永年間にもあつたが、大噴火は靈元天皇の天和四年改元して貞享元年（西暦一千六百八十四年）に起つたもので、七ヶ年續いて、元祿三年に終つたのである。之は種々のものに載つてあるが、今其一二を挙げると、常憲院殿御實記貞享元年二月の條に曰く、

此月十六日より、二十七日迄、伊豆大島の山焼しが、その焦土海に流れ出て、水面七八町ほど山の如くなれり。此響により、島中の民家の器財、悉く壞損せし由注進あり。

慶安元祿年間記貞享元年三月の條に曰く、

豆州大島の山、去月十六日より焼出同二十七日迄火留り不申、焼候様子は山中より峰へやけ上り、蠟の如く海へ焼け流れ、焼土かたまり候所、長さ七八十町程山に成り、横は四五町又は二三町有之由云々

とあれば此噴火は所謂爆發ではなくして、熔岩流を押し流せしものであることは明である。而して大島山火記の左の記事にすれば、三原山の大火口は此の時に生じたるもの、如く思はれる。大島山火記に曰く

右三原山は大島の真中に有之、天和四子年より元祿三年まで、七ヶ年の間、山焼候節、山上に凡十町四方程の洞穴出来、今以て其儘有之、深さ何程有之可哉難計御座候云々

次は後桃園天皇の安永六年、(西曆一千七百七十七年)七月、翌七年三月九月十一月の噴火にして、凡十六年活動を續けた。此の噴火も多く、書冊に其記載あれど當時の代官江川氏の之に關する公文書を集めた、大島山火記にある一二節を抜萃せんに

當酉(安永六年のこと)七月二十九日暮時、右洞穴(天和四年の噴火の時に生ぜし

三原山頂の火口を指す)より火氣吹出て夜分は山上一面に火氣相見、晝は煙斗りにて火氣は相見不申候。山焼強弱有之焼音夥敷折々地震仕り髪毛より細黑白長さ一寸位より二三寸位有之灰並に小さかなくその様成灰降候得共八月二十五日頃迄は差而相替候儀も無御座云々

當戌(安永七年のこと)三月二十二日、三原山御洞成亥の方焼崩れ、夫より中の澤へ焼下り、泉津村より東の方、右村より平日百姓稼山へ參候道下にて焼止り申候。中略、且又同月二十七日、御洞より丑寅の方夫より字ごみ澤と申す澤へ焼下り是は海邊へ焼出て、磯より海へ凡長壹町程、横拾町餘も有之焼出高さの儀は海中水上にて凡と五六間程も高く相見申候

安永七年十一月二十一日、晝時頃、三原山より凡二里程隔、泉津村の内、宇葉地釜と申所より煙立火燃出候段右の者共より島役人へ注進申出候旨云々

此の噴火はかなり盛なるものであつたらしい。中野澤、赤澤、ゴミ澤へ熔岩を流し又

髪の毛云々の記事によれば火山毛を飛ばしたのである。火山毛はハワイのキラウエア火山には多くあるもので、ハワイの土人は之を火山の女神ペーレーの毛髪であるといふて居るが、日本では嘗て採集せられた事がない。然るに幸にして、我輩は一昨年始めて之を火口底に於いて採集しました。夫から今一つ申上たい事は三原の御洞の中から流れ出た熔岩のために、外輪山の一部が押し破られたのでヨセの腰の北側がかけて居るのであらうと考へる人もあるが、我輩は此の説には賛成せぬ矢張り前に安永三年の條にいふた様に外輪山が一部爆發のために、吹き飛ばされて、恰度其方向に熔岩が流れ出て、之を蔽ひ隠したものと思ふ。中野澤及びゴミ澤の方角が丁度之を説明するに都合がよい。一體熔岩の流れるのは至つて緩慢なものである。此間のイタリーのベスピュース火山の噴火の時なども熔岩の流れる前に僧侶が聖母マリアの像を立てて何卒此所までとまつて貰ひ度と祈りをする、熔岩流が頓着なく押しよせて来ると、更に下の方にマリアの像を移して此所までと止まる様にと祈りをした。ハワイの火山でも同様に、女神ペーレーの御機嫌がわるいと噴火が起り、ペーレーは火の車に乗つ

て押し出すといふて居るが、人民は熔岩流のよせて来るのを見て逃げる事が出来るのである。先年三宅島の噴火の時、二人の農夫が山稼に出て居たとき、噴火して熔岩流が、自分等の居る所と居村との間に押し出して来た。一人は之を見て、熔岩流の前を馳せ抜けて歸つたが、一人は後れて止を得ず海中を泳ぎ歸つたといふことである。誠に面白い話は、此時泳ぎながら海底をうかがふと、眞赤な熔岩が海底に横つて居たといふことである。熔岩はなかなか冷へないものであるから、海中に入つても赤かつたのは事實に相違ない。此後時々小さな噴火があつたが、先づ著しいのは明治九年の暮から、同十年の始めの噴火で、此時に前述のナウマン山が出来たのである。三原山活動の歴史は先づ此様なものである。三原山の活動は現今極めて静穏で、彼の火井の中から水蒸氣と亞硫酸瓦斯と出してゐると、ナウマン山の東側及火口壁の所々から水蒸氣を出して居るばかりである。火口壁は殆ど直立して居るが其北側の方で深さ約百メートルの所に棧敷のやうな中段がある。之は幅二三間より十間位もあつて、ザット火口の周圍の三分の一位に廣がつて

居る。この棧敷から火口底までは更に三十メートル位ある。火口底は大體水平であるが絶壁上から見下したのとは違つて其場所に行つて見ると中々複雑して居る。概して云へば火口底の西側は砂地で、東側は累々たる岩塊の堆積物である。此の砂地は三原火山に降つた雨水が流れ落ちて作つたので、水路は立派に知れてゐる。ナウマン山は此の砂地の南側に立つて居るので、砂地からの高さが約六十米突ある。此の砂地の北端で棧敷に近く吾々が蛤山及半缺山と名づけた二つの小丘がある。火井はナウマン山の東側にあつて、其口は斜めに南方に向つて居るから火井内を成るべく奥深く見るには其南側に行かねばならぬ。之にはナウマン山の東側と火口壁との間にある峠を越してナウマン山を一周して火口壁の南部に行くがよい。然しこの位置でも火井の底は見えない。其の深さが餘程深いものと見える。火井の北方は二三の階段をなして前述の火口底の東半岩石累々たる場所に接してゐる。此の階段のところには、屏風の様な形の岩が四五枚互に平行になつて並んで居る。火井が北の方に奥深く成つて居ることと火井の北方には階段があつて地盤が崩れて出来たらしいこと等を綜合すると今後火

井は北方に大きくなるのであらうと思ふ。三原山で採集せらるるもので面白いのは第一に彼の火山毛である。我國では此處が最初の産地である。火口底にあるので長さ二寸位のものがある。暗褐色の硝子の絲である。これは熔岩が白燻されて融解して居るものが吹飛ばされて糸を引いたやうになつたのである。次に面白いのは霰石で他所では鯉節石ともいふ。紡錘状の火山弾である。此の出来方に就いては種々の説がある又ヨセの腰に木葉の化石があるが、其處に直徑二三分位の丸薬のやうなものが密集して化石のやうになつてゐる。之は噴火の際細かさ熱灰の上に雨が降ると雨滴が風に吹き飛ばされて灰と砂とで玉を作るのていはば雨垂の化石である。今噴出年曆を左に掲げて參考に供す。

噴出年曆	時	代	前後噴出年數
紀元一三四三年	天武天皇白鳳十二年		
二〇八一年	稱光天皇應永二十八年		七三八年



二三四四年	靈元天皇貞享元年	二六三年
二四三七年	後桃園天皇安永六年	九三年
二四三八年	後桃園天皇安永七年	一年
二四四三年	光格天皇天明三年	五年
二四八二年	仁孝天皇文政五年	三一年
二五〇六年	仁孝天皇弘化三年	二四年
二五三〇年	明治天皇明治三年	二四年
二五三七七年	明治天皇明治十年	七年

寄生火山の著しいものは二子山、丘之平、愛宕山等である。二子山は高さ六百三十米突あつて三原山東南山腹にある。頂上二峰にわかれてゐるので二子と呼ぶのである。その噴火口は二峰間の凹處が其の遺蹟である。丘の平は外輪山の麓、差木地の北方

にある樹木翁鬱たる圓錐形の山で高さ二百三十一米突噴火口跡は頂上にある。愛宕山は元村の西北にあつて松翠したる小丘で高さ百二十一米突、形状圓錐形である。この山に隣れる三峰山も噴火の跡を認むることが出来る。また丘の平に近く太平山がある。この山も噴火せし跡歴然たるものが吏る。波浮港は三原山の東南方にある灣入で、今でこそ港なれ、元は波浮の池といつて火口湖である。それが元禄十六年十一月廿二日海嘯の爲めに一部が崩壊して海水が通ずるやうになつた。而し港口が如何にも浅く巨巖の蟻れるため退潮には船が入港することが出来なかつた。寛政十一年上總國周准郡市宿の人、秋廣平六幕吏となつて醫師をこの大島へ送つて來た時に此の港の將來有望なる良港となるだらうと見込んで、幕府に願つて開鑿の事を乞ふた。そこで幕府は無人の地であるといふので差木地村の一部を割いて波浮港に置き、尙官から畑七町七反歩、山林若干を平六に下賜され、本港の開鑿を委任せられた。こゝに於いてか平六は港口取擴めの開鑿工事に従事した。多年の經營によつて竣功した。明治三十四年横須賀鎮守府は更に港口を浚渫して、水雷艇

の出入に便するやうにした。  
湯場 外輪山北方山腹に一の噴汽孔があつて水蒸汽を噴出してゐる。其上に浴室を設けて天然の蒸風呂が出来てゐる。儂麻質斯刀削打撲等に特效がある。

### 五、沿革上ヨリ見タル大島

開創 は遠き神代の昔に胚胎してゐる。天孫降臨に先ち事代主神は國土を天神に献上して、出雲の國から船出した。潮流のために伊豆の海中の島を發見して此處に宮居を定めて、世を避けて隠れ居られた。三宅島はその宮居のありたる處、此神に隨從されて眷屬は伊豆海島の各處に居られたのであらう。大島には此の神の後妃波分比賣命往まはれ二子をあげさせられた。長子を阿治古命次子を波知命と申された。當時この御三方が住まはれて、開拓を加へられたことであらう。これまでは神様たちの事で、人の住ひ始めたのは、孝安天皇の御代から其祖先は西南地方紀伊半島あたりから移住したのであるらしう。

中古の世から流竄の地となつた。天武天皇の四年麻績王の子を流罪にした。これが此島へ配流の嚆矢である。村田吏名倉は同じ天皇の御序配流の身となつて此島に來た。尙文武天皇の三年に役小角が配流された。小角は大和葛城上郡茅原村の人で咒術の行者であつた。年が三十二で家を捨て、巖窟に居る事三十餘年、松の實を食ひ、藤葛を着て鬼神を驅役した。水を汲み、薪を採るに思ふがままであつた、若し人が命に背くときは、咒術を以て縛した。此の頃韓國廣足といふものがあつて、その妖妄衆を惑はすとして、朝廷に誣告した。文武天皇詔して小角を捕へしめたが、捕ふことが出来なかつた。そこで其母を捕へた。小角母を思ふて自ら出でて縛に就いた。そこでこの島に流された。後赦されて母とともに唐にいつたさうだ。

其後保元の亂に 源爲朝に謫せられ、代官島三郎太夫敏定一忠重とも信定とも忠光ともいふ一の女婿となつて、三子を設け、遂に近隣の諸島を略して八丈島に據つた。永萬元年青ヶ島を發見し更に琉球に渡り數年の後八丈島に歸り嘉應二年大島の小島の館に自裁した。時年三十八。

島治上の沿革 徳川幕府以前は知るに由なけれど徳川幕府の時より、伊豆國代官の所管に屬し、寛文中、今の元村に島手代の廳を置いて、伊豆七島を支配させた。享保八年、之を廢し神職藤井氏及村長二名を以て公事を執行せられた。これ地役人の始である。寛政十二年波浮港開鑿のため、秋廣平六官命により波浮港一切の事を行つた。茲に波浮港一式引受人なる役目を新に加へた。これ以前は全島五ヶ村—新島村岡田村野増村差木地村—であつたがこの時波浮港村を加へ六ヶ村となつた。其後嘉永二年に岡田、泉津、野増、差木地の四ヶ村に名主及年寄を置かれた。明治の御代となつて、戸長、村用掛、島用掛等の役を設けられた。明治十四年に更められて、地役人、名主一式引受人、年寄等の舊制に復へつた。地役人は知事の命を受けて布告諸達を島内に施行し、一島の事務を總理し、名主一式引受人を監督する。名主、一式引受人は知事の命を受け、特に地役人の監督に屬し村内一切の事務に従事し、年寄は名主を輔け、名主事故あるときは、其事務を代理す、一島の事務所を島役所、一村の事務所を村役所と呼ぶ。明治三十三年島廳を設置せられ、地役人を廢して島司を置かれた。明治四

十一年四月より島嶼町村制施行され、村長村會議員等の自治制が行はれるに至つた。管轄上の變遷について一言すれば明治二年六月韭山縣に屬し、四年十一月足柄縣に移され、更に九年四月靜岡縣に轉じ、明治十一年十一月東京府の所轄になつた。現今に於ける島治の一般を概説するならば、島廳は元村にあつて、東京區裁判所の出張所は元村と波浮港村にある。警部在勤所は元村に、巡查駐在所は波浮港村と岡田村とにある。又元村には税關監視署もある。郵便局は元村波浮港村の二村にあつて、伊豆伊東町との間には毎月二十回以上の郵便船が往復してゐる。殊に電信は伊豆下河津村野増村間伏の間に海底電線が通じてゐる。全島約二千餘戸、人口五千九百を算し、女よりも男の方が稍々少ない。産業 農業漁業が主であつて、商工業の發展近來頗る見るべきものがある。農産の主なるものは麥陸稻甘藷等で、全島雜木林より得る薪材は莫大なるもので薪炭輸出額年々拾萬圓以上の巨額に達する。牧牛は風土に適應する上に優良なる純粹ホルスタイン種の種牛によつて、改良に改良を加へ、毎戸殆ど飼育せざるものなく盛況を見る。牧

牛の目的は搾乳して乾酪を製造する爲で、その製造は大島煉乳會社の經營である。朝  
 夕二回各村の搾乳所に連れ行き搾るので、其價一合僅かに一錢五厘だ。榨の實より榨  
 る椿油は、島婦人の髪の毛の漆黒に光澤があつて美しく長いことの天下に著名なる  
 と共に髪油として珍重せられ、歡迎せらるゝので産出も年々盛大に赴く有様である。  
 漁業は水産組合を設けて技師を聘して改良を圖りつつある故追々發展の域に達するこ  
 とと思ふ。重要漁獲物は鯉、鱈、秋刀魚等である。

島農會農事試験所は島地に適切なる農作法を試験して、島民の農事に効果多き指導と  
 誘掖とを與へて居る。

商業も近來非常に發展し、伊豆諸港間と取引するは勿論、京濱關西方面にまで、販路  
 を擴張しつつあるは、時世の然らしむるところとはいへ、盛なりといふべきだ。

教育 各村に小學校の設けありて、内地に遜色なき設備完成して、村に不學の戸なく  
 家に學ばざるの兒なき有様である。明治七年波浮港村の人、秋廣傳吉、先づ教育の必  
 要なるを感じて小學校を其村に設立した。これ實に伊豆七島に於ける學校設立の嚆矢

であつた。

宗教 概ね佛教であつて宗派は曹洞宗日蓮宗浄土宗の三宗派である。近年基督教の傳  
 導盛にて元村と波浮港村とは同盟教會の講義所がある。尙天主教も行はれる。

衛生 に就き一言すれば、此島には昔は醫師がなかつた。病にかゝるときは、神佛に  
 加護を祈り、禁厭の法を行ひ、暖を爐火に取り、養を米汁に得るか、然らざれば流人  
 中の巧者より藥を貰ひ、治療の法をたづぬるの外には、施すべき術もなければ、癒す  
 べき法もなかつた。けれども一般に長命であつたのは氣候がよいためか不思議と思は  
 れる程であつたとのこと。近頃は各村にて村醫を聘して居るし、島廳もまた銳意衛生  
 の改善に努力して傳染病院隔離舎の如きも完全に設備せられて今は昔日の比でない。  
 道路 幅一二間に過ぎない。火山島なるが故に各村落を通ずる道路は坦々砥の如き所  
 もあれど、險惡なる個處あるは蓋し止むを得ぬことで、追々改良を加へらるること  
 あらう。

各村間里程表

元村	二三町二六間	二里三九町四九間	三里三三町	一里一七町四間	二里一五町五六間
野増村	二里一二町二三間	三里九町三四間	二里四町三〇間	五里三五町一三間	
差木地村	三三町一一間	四里三町四二間	三里二町五〇間		
波浮港村	五里三町五二間	四里五町			
岡田村	三四町五二間				
泉津村					

### 六、傳説ニ富メル大島

島作りの傳説 伊豆七島には三宅記といふ舊記があつて七島に關する神話が傳はつて居る。今大島に縁由あるところをかいつまんで述べよう。

昔印度の國の國王にうるはしき王子が御在になつた。此の王子は藥師如來の化身であらせられたそうな。さて如何なるわけがあつたか、父君の御勘氣を蒙つて、追放の御身の上とならせられ、金枝玉葉の御身にありながら、棲むべき處としては荒波の

入重の潮路を漂ひ漂ひ、茜さす東のわが日の本の伊豆の海、はるばるこゝに流れつき、こゝに宮居を作らんとて、御供に仕ふる神々たちに仰せらるゝやう、この海中に十の島をば作り成せと。隨ひ來れる神々はこゝに雷神龍神山神等を驅り集めて日夜々島作りのために海中焼け出だして、そのすさまじき言語に絶するの有様、先づ第一に造つた島を初島と名づけ、第二に出來たる島に集まりて、更に他の島を焼き出すべき評定をせられた故、神集めの島即ち神津島といふ。第三に焼き出せるはことの外大きい島なので大島と名けた。第五に潮の泡を集めて焼き出したので其色白きゆゑ新島と呼ぶ。第五は家三つ並びたる様なので三宅島といひ。第六は明神の御倉とて御倉島。第七は遙に遠き沖なれば沖島今の八丈島、八番目に小島、九番をおふの島大野原島、十番目は利島と申した。

王子はこの島々に住まはれ、三宅島に宮居して三島明神とぞ申された。此の明神に五人の後、おはして、一人をはふの大后と申して大島にお住ひなされた、この後の御腹に太郎王子おほい所、次郎王子すなひ所の御二方があらせられたと。これは事

代主神の事蹟を傳ふるもの如く思はれる。萩原正夫著事代主事蹟考参照ありたし尙噴火して島の出來たる順序の面白き感がある。先づ箱根熱海の脈なる初島、神津島、大島の最初に出來たる、次に新島より天城山の脈をひける三宅、御倉、八丈、小島、大野の諸島噴出せる、荒唐不稽に似たる傳説とはいへ、地理上亦一考に價するものがある。

日忌祭の傳説 これは泉津村特有の風習で、毎年一月二十四日二十五日の兩日に行はれる。その起原を口碑に傳はれるまゝに記せば、昔幕府からの命によつて代官各村を巡視して當村に來たり暴戻無道の振舞ありし故、村民二十五名は代官を襲ひ殺す。茲に於いてか他の人々は大に驚き幕府の嚴罰あらん事を恐れて、二十五名の者をば丸木船に乗せて海岸から流した。その船利島に漂發したが上陸を許されなくて、更に神津島にいたつた。そこで事情を訴へて兎に角上陸を許してもらつた。此の事があつて以來、代官の亡靈海上より襲ひ來ると信じ、かく日忌をなして亡靈を祭るので、同日は利島と神津島とはこの村の如く日忌祭が行はれてゐる。

爲朝弓張月物語 馬琴の作、椿説弓張月には次のやうな話が面白くかゝれてある。

一、島人を威服す

爲朝流されてこの島に上陸した其日の事であつた。見馴れぬ島の景色に心をやりて餘念もなかつた其折に、耳朶に響くは人馬の足音、法螺貝鳴り、喊の聲おこつて騒然たるに驚き見れば、島人等手に手に長き竿を持つて野牛の群れをかり立てて、走り廻はるその中に、殊の外たくましく黄牛荒れ狂て、群る人の眞只中に飛込ひや、人々慌忙きて一崩れに崩れかゝるを、爲朝はつたと左右の角を拖擱んで捻倒して動かせず、遂に搦め捕つて繋ぎ留めたる所に、前面の山間より駆け立つた荒馬は哮けり哮けつて、十四五人の若者目がけて跳りかゝれば、爲朝きつと見て行ちがひさま、鬣ひつかんでひらりと馬上に跨つて、芝生高峰のきらひなく、乗り廻しかけ飛して、野牛野馬を追詰め追詰め暫くの間に搦め捕つたる牛馬百五十匹程、その神變不測の武者振りに、驚き呆れ且つ歡んで、爲朝を神と崇め、島主と仰ぐこととなつた。と、英雄に對する虚構の傳説のやうではあるが、此島には元來野牛野馬が蕃殖して野増差木地泉津三箇村

の民は之を捕へて使役したことが、舊記に散見する處でその野牛を捕ふる方法は馬琴が弓張月に書いたやうに頗る勇しいもので、先づ五六人の者は裸馬に跨り、野牛野馬の群れに乗り入れて、驅け廻る中、牛は怒つて馬上の人に飛かゝらうとするを、早くも馬より飛下り兩手にて角の根元に手をかけ組伏せ搦め捕る、馬も同じ様に追廻して疲るる處を、尾つゝをひきとめ、或はたてがみを引つかんで捻伏せ搦捕る。こうして捕へた野馬野牛は或は飼育し或は賣拂ひ等したので今は跡を絶つやうになつた。又幕府にて山羊牝牡二頭を放飼したことがあつた。これが次第に蕃殖して公儀羊といつて差木地泉津に番人を置いて、之を捕殺することを禁じた。天保年中に數回の噴火で山野の草木が枯死するやうになつたので、無数の山羊は飢餓に迫つて、民家を侵し作物を害した。そのため之を狩盡したとの事だ。

二、紙鳶揚げの悲劇

鎮西八郎爲朝は鳥三郎太夫忠重が女婿となつて、三子を擧げた。鳥守となつて既に十年、長子爲丸九歳、元服せしめて鳥冠者爲頼と名告らす。次子朝稚七歳、三子鳥君五

歳也。時に爲朝が許に使者來たつて密かに告げ申すやう。某下野の國足利義康の郎黨に梁田次郎時員といふ者主君善康一大事を告げ申さんとて來た譯ですが、くはしい事情は申上ぐるまでもありません。主君の書簡は私の襟に御座いますと恐る恐る差出す秘密の一書、爲朝讀み終はつていふやう、狩野介茂光が讒言によつて、官軍を向けるることは、豫て覺悟せし所、其期に及ばず稚き子ともを刺し殺し、肚かさ切つて名を此の島に止むるは生き長らへて物思ひするより勝ることなれど、善康一家の好を忘れずわが子どもを乞はるること黙止がたいが、若しその望に任する時は、爲朝配ひ軍として、恩愛の情に溺れてその子を國に遣はして一族の者に養はせたなどと、死後人に笑はるるも口惜しいことである。さればとて嫡男爲頼は近頃元腹さしたので、世の人もよく知つて居ることであらう。二男朝稚は年僅かに七歳だが兄にも劣らぬ優れもの、これと思へどさて公然と遣すわけには參らぬ。所詮運を天に任せてかやうくにして朝稚を棄てよう。汝下田の浦曲に待ちてこれを拾へ。と申し含めて別れた翌くる朝、鳥冠者爲頼は弟の身の上に異變あるべしとは神ならぬ身の露知らぬものか

ら、鬼夜又が作りたる大きな紙鳶を飛ばさんと野鳥が館の前庭にて、嬉々として風待ち居る所に、爲朝茫然とうち笑つて申すやう、かやうな風箏に風箏がないてはならぬ。よきものを貸さう。これを附けて見よとて、腰より一管の笛を出して。朝稚に渡した朝稚よろこんで受取らんとすると、誤まつて忽ちはつと地に落し歩石に打つけ、笛はさつくとくだけた。朝稚はいふに及ばず、皆々顔色を失つて手に汗を握つた。その時爲朝勃然と聲ふりたつて、やをれ朝稚、汝輕忽にて事を慎まぬ故、かやうな過をするのだ。この愚蠢を養育せば、行末親に恥を見せ、家をも汚すであらう。其處退くなと、刀の鞘に手をかけ給へば籠江（爲頼、朝稚の母）鬼夜又あはてふために遮りといめてともく諫めていふやう、稚子の過輕くはあしますまいけれども、申さば僅七歳になつた許り、只一管の笛のために、骨肉を傷ひたまふは、まことに歎かほしいこととございますれば、まげてお許し遊ばしませと、言葉をつくしてわび入れば、爲朝頭をうち掉つて、ねまへ等のいふことは甚だ謂はれがない。笛は我家の寶とはいへ、惜しいことではないが、親を親とも思はぬ罪は、稚しとてこの儘ゆるすことはな

らぬ。世の諺にもいはずや、虎の子を養つて患を忘れるといふことがある。しかしねまへらがそれまでにいふを、きかないなら、慈なき親と思ふであらう。今眼前に刀の錆となすことは許し、笛のかはりに這奴を風箏に括りつけて、風にまかせて飛ばし麻糸断つて走らさう。倘幸に沖ゆく船に落ちかゝり、或は伊豆の湊などへ落つれば九死に一生を得るわけ、獅子は其子を谷より落して剛柔を試めし、死すと雖悔ゆることなしとか。勇士が子を捨つるもまたさうだ。汝等二たび諫めてはならないぞと朝稚の襟髪かいつかんで、紙鳶に括りつけ、揚げよ揚げよと下知すれば、爲頼恐る恐る父の前に膝づいて、申すやう、爲頼がつまらぬ遊してかやうな事の起つた上に弟までも失なうはさて何うしたものでありませう。あすよりは、朝稚居らずばなかく心に淋しくて慰むこともなく、うら悲しい事で御さいます。どうぞこの爲頼を、ねもふ存分に遊ばして、朝稚を御ゆるしを願ひます。さもなければ二人ともく紙鳶の綱手に引かれて海中の水層となしたまへ。と己を責めて、親を恨まぬ孝行の同じ思ひに鳥君が、たゞあどけなく、免させたまへとばかり泣きゐるに、かはるくの袖の雨、霽



間は更にあらざりき、爲朝「いはれなき汝等が諫言、無禮であるぞ」と叱り退け、麻索とつて宙宇に飛ばせば折しも吹くる浦風にひらりと漂ひつゝ雲間遙かに昇り行き姿は見えず、爲朝は武士の誓を違へじと、義によりて心を鬼と恩愛の絆を絶ちて念ずらく、わが子の生死の際、仰ぎ願はくは源家累代の氏神、正八幡大菩薩、擁護を垂れさせて、朝稚を恙なく下田の浦に落させたまへ。と眼を開けばすてに行えも知れずなりしかば尻居に撞と腰打ちかければ筋江爲頼鬼夜叉等はたゞよと歎く聲さへ痛ましいつも哀れなる限りであつた。時しもあれ西成の方に當つて、鬩壁と閃き昇る時員が暗號の烽夥しく蒼天に輝いた。

三、末路

沖なる鷗にはかに群れ飛ひ、葦鹿頻りに鳴き騒ぐを、爲朝耳そばだて、筋江鬼夜叉を見かへつて、「あれをみよ、海の彼方の頻りにさばがしいのは討手の兵船が攻寄せたてあらうぞ。早く斥候せよ。」と仰せも果てぬに鬼夜叉は丘に走せ登つて、と見こう見して申すやう「さても夥しい軍勢でござる。敵は五百餘騎、兵船は二十五六艘、眞先

に漕ぎ来る蝶の紋に水引したるは鳥三郎太夫忠重か、菴に木瓜は工藤茂光、三鱗は北條、その外の旗印かと見えませぬが、勢猛く見えまする。と手にとるやうに申せば、爲朝冷笑ひ、「さらば最後の用意をなすべきぞ」とて武器とつて床几にかゝり爲頼島君を左右に侍らし、筋江に酌をとらして最後の盃をめぐらす、かゝる處に注進の士卒、息せき切つて、申すやう「寄手の兵船岸近うよせ候ぞ、早く防ぎをなしたまへ」と、爲朝さらばと、渚の方に赴いて、弓杖ついで沖の方を見渡せば、先陣に進む一艘に兵士二百餘人、射向の袖を差かさし、船を乗り傾けて渚近くなる程に、其間はや三町ばかりを隔てたるに、荒浪にゆりゆられて、船を左右なくは乗りつけ得ず、御曹司爲朝はこの有様を御覽じて、さては先陣は鳥三郎太夫忠重か、最後の一矢を放つて這奴を海に沈め、茂光等の肝をひしぎくれん」と大鎗をとつて打番へ、小肘の廻る程引切つて、漂弗と發ち給へば、水際五寸ばかり置いて大船の腹をあなたに射徹して兩方の矢目から水が入つて、船は忽ち海中に卷込まれた。忠重初め二百餘人の軍兵どもは、浪間に漂よひ、或は溺れて魚腹に葬られ、或は後陣の船に扶け乗せられて命を

拾へるもあつたが、これは僅かに五六十人に過ぎなかつた。官軍の船どもこの爲體に肝を潰し、舌を捲いて、だゝ遠巻にして續いて寄するものはなかつた。元來爲朝は覺悟を定めしことなれば、一足も落延びんとは思はて、こゝに潔よく肚かき切つて、最期を遂げんとのみ思ひしに、鬼夜叉が命に代らんといふ誠忠も黙止かねた。ことに稚き子どもらを敵に渡さんも残念なことだ。如何にしたものかと、思ひ惑つてゐると鬼夜叉、頻りに諫めて鎧の袖を引きつゝ、豫て用意の渚に誘引ひ船に乗せまゐらせた時しも、天鬼夜叉が孤忠を憐んで義士を祐け給ひしが。俄かの霧につゝまれて行衛も知らぬ沖に漕ぎ去つた。残れる鬼夜叉館に火かけて主君に代り敵を欺いて自盡した心の程ぞ美はしい限りであつた。八郎御曹司は後に八丈嶋の屬島小島の館にて自滅せられたのは承安三年癸巳秋八月十五日のことであつた。今は八郎明神とて神に祭られて崇められてゐる。大島に俚語あり「爲朝の弓手の力に恐れてや、いもせぬ先に落つる瘡」と

四、大島太郎爲家

太郎丸は伊豆の大島を管領して大島太郎爲家と名告つた。後に爲政と更めた。保元の亂に討もられた爲朝恩顧の郎黨の子孫、舊恩忘れがたく、大島に集り來たり、爲政に仕へたので其家ながく榮えて、子孫繁昌したさうだ。

おたい明神の由來

波浮港字おたいにあるおたいねさまの由來を語ればこうだ。豊太閤朝鮮征伐のときに小西行長の軍勢が朝鮮の一女子を生擒つて公方に送つた。太閤は養育して徳川家康の許にやつた。家康は静岡に居られた。然るに當時静岡には天主教の教會が建設せられてあつたので、此朝鮮婦人も教會の洗禮をうけて信者となつた。靈名ヂユリヤと呼ばれた。家康ヂユリヤを脱教させやうとして、いろ／＼に手段を講じたが聞かない。そこで怒つて娼家に遣はし、節操を潰すか脱教するか悲境に置けど尙脱教せないの慶長十七年大島に遠島申付けた。ヂユリヤは静岡より駕籠を用ゐず、徒歩したため激甚の足痛に堪え、伊豆國網代の港から船にて大島に渡つた。大島に在るや常に祈禱を怠らなかつたので、島民もこれを信仰する傾きがあつた。在島一ヶ月許にて更に新

島にうつされた。その頃公方の大奥に仕へた一婦人も天主教を信仰したために遠島申し付けられて新島にゐた。ヂユリヤが大島から新島に移されると島民また信仰するやうになつた。そこでまたさらに遠き神津島に送られてそこに歿した。大島に流されてから神津島にてなくなる迄、四十年、故國を離れてたよりなき彼の弱き心は、強き信仰となつてかくまてに憂目を見たことであらう。ヂユリヤは日本にてオタと呼んだ、アチーは大島にて婦人を呼ぶ俗語であるから「オタアネー」いふのは「オタ婦人」といふことで、それが訛傳されておたいねの地名が残つたことであらう。

### 七、風習上ヨリ見タル大島

島民生活の様相 女でもてる島男程の果報者はあるまい。女の手で何から何迄萬事萬端營まれ、男は其の扶養をうけて遊んで居ればそれでよかつた。また女として夫の扶養が出来ない様では、島の女の意地がたゝないと。けれど男の遊惰は昔の事、今は中々左様な譯ではない。農に漁に、内地までも出稼し、或は商人に、或は船員に、進取

的になつて來た。昔とかはらぬ婦女の働さぶりは、また甲斐くしいものだ。二三十貫もあるものを、頭上にさゝげて峻坂を上下したり、牛を追ひ、薪木を伐り、或は水汲みに、或は草刈に、或は畑を耕作し、或は椿の實を採收に、家があれば糸を紡いで布を織り、外に出づれば、貨物の運搬に勞役して、餘念がない。

人情 古い書物に「男は髪を結ばず、女とてもこれにひとしく、紅粉などいふものは世にありとも思ひ知らず、形状こそかくおどろくしけれ、その心ざま淳朴にして、人欲の私薄く、假初にも偽りかさることなし、只憂ふべきは五穀登らずして食に乏し、この故に人に逢ふては必ずあさげくはあたかといふとぞ、これ朝飯を食ひ給ひしかといふことにて國地の良賤、人にあへば必ず暑寒を逃ふるごとし云々と心は優しく朴直で、そして親切で保守的な所も見える。婚姻のやうなことも島民相互の間にのみ行はれて、決して他處のものとは結婚しない。それだから一村一島殆ど骨肉親戚の間柄で、恰も一家族のやうな有様で健闘訴訟等の紛擾を起すことはない。常に和氣藹々として理想の樂天地を現出してゐる。

婦女の容姿 體格が端正で骨格の逞しいことは、内地のもの、及ばないところで、容貌優美で頭髮の澤山で長く色の黒く光澤があつて漆のやうだ。南海島志には、「色白くして髪黒くして長し、立ちて髪を垂るれば地に達すること一二尺あり常に紅粉を裝ふことなけれど、體格優に容貌美しく」云々。又伊豆日記には「女の髪いと長し、殊に長きは六尺三寸あるを見たり、またかたちはすべてわかし。年も五十なりといふもの四十には足らじとぞ見ゆる。大かた見目よし。白髪になりたるを見るに國地の若き女のかみより多し。百般の物貨を悉く頭上に於いて運ばしむ。」と見えた。處女は昔の島田髷で今の島田とは結び方が違ふ。たゞ髪を幾重にもたゝんで結ぶ。一旦嫁入つた女は、インボンジリといふに結ぶのでこれは恰度内地で羽織紐を尻尻に結ぶのによく似てゐる。元結はつかはない。額に濃い紺布の養老絞りに染めた簡單な繪模様のある鉢巻をするので、これを「ほうめん絞り」といふのだ。

衣服 女子の十歳前後のものは紺地の紋付が、裾模様ものを着る。十四五歳から上のものは、黒の五紋を着る。島の紋はすべて一樣で臺澤濁といふので花笹の草巻とも

いふ。夏季は帷子を、冬季は袷衣を、袖は角袖又は殺袖で、帯はしめない。二布の前垂を用ひて帯の代りにする。近頃交通が瀕繁となるにつれて、餘程内地風に化せられて今では五紋を着用するのは老人間にのみ見る有様となつた。襷は女の大切なもの、一つであつて、實用ばかりでなく、裝飾にするので、美を競つて之を作り、多きは百筋以上も所持するものがあると。禮服としては、冬は縮緬、夏は麻で、紫又は水色に染め、五紋其他の裾模様は刺繍であらはず。帯は禮服の時だけ内地と同じものを用ゐる。元村にては體前にてお太鼓結びにして横長に結ぶ。岡田村では體前にてお太鼓結びにして長く膝に届くやうに垂れ下げる、其外の村々では内地とかはならない。そして禮服の時は紫縮緬の「ほうめん絞り」を頭の左側に結んで其端を長く垂れる。

食物 ここには米を産することがないので昔は米を常食としなかつた。甘藷玉蜀黍が常食である。今では大概米飯を食するが或るものは尙今も舊習のまゝで甘藷玉蜀黍も常食とする。甘藷と玉蜀黍は風土に適するためか、非常に豊産で且美味しい。其他には麥粟を食する。飲料としては酒を嗜むことは一般である。

家屋 屋根は概ね瓦葺で、堅牢なことを主とし、周囲には高い石垣か竹籬か板塀を繞らして、屋内に廣き土間があつて、部屋を「ゐど」(圍爐裡のある所)、「ちやうだい」

(納戸)「てえ」(座敷)の三つにしてある。

貯水の方法 元來火山島のことて、水利悪しく、用水に乏しい。それにも拘はらず、住民の不便を感じないのは、貯水の方法が完備するからである。其方法は先づ家の軒に樋をめぐらし、更に門口の一隅に貯水井を設け、其井戸の口径六尺、深さ一丈、内部はセメントにて塗りかため、篋を通じて水こしの装置をなし、一旦雨が降れば、貯水井に通ぜる篋を一先づ取外し、屋上の塵芥を清めて、更に篋を井戸に通じて、雨水を之に導く。而して漉された清める水がこの貯水井に貯へられる。これを必要に應じて釣瓶で汲取るのである。それならどこでもこのやうな雨水を貯へたのばかりかといへば決してさうではない。各村には山間に清水があつて、これを水槽に貯へて飲料に供する。この飲料水を汲むに、何れも年頃の若い娘さんが桶を頭上にさくけて、行きかふ有様は畫にもしたき心地がする。

言語 すべて内地との往復瀕繁な所では、殆ど伊豆地方の言語で、殊に一般に男は訛言がないが女特に年老いたる女の言葉には理解の出来ないのがある。早口で語尾を長く延ばすやうな傾があつて、初めの音は正しいが、中途にあるとき、又は語尾にあるときは、音便上の訛音が多い。尙全く耳馴れぬ言葉にて意味の悟り難いものや、古語のやうなもの等がある。

婚儀 婚姻の式は内地とは異つて、先づ男は女の家に通ひ、女は夫と定めたる男の家にて日毎に水汲み捧げて出入するを、男の家にてはそれと察し、動作などに注意して、心の叶へば婚姻を結ぶのである。しかし上流の子女は、双方の親と親との間に婚約をなし、然る後に婿は嫁の許に出入して、黄道吉日を擇んで婚禮の式を擧げる。さて其日となれば、婿の家では親族縁者寄合ひて、酒宴を張り、人をして嫁を迎へる。嫁は縞の着物に襷をかけて、平素仲睦ましくせる友達とともに、婿の家へ赴いて、土間の片隅へ立つて居る。此時祝宴すす／＼酬になつて、家の前庭では附添の人々菓子を多く人々に分配し、家の中よりは萩餅を席に出して饗應する等、上へ下への大混雑に

紛れて、大事の嫁御は人知れず逃げ歸る。此時嫁の其儘止まりて、逃げ歸らないのは人の賤む所である。そこで婿君は嫁御の許に行き、嫁は翌朝常の如く水汲み捧げて、婿の家に留まる慣例だ。近來内地風が上流の家庭に行はれる。

葬儀 葬儀は死者を敬ふ情深く、殊の外鄭重に執行せられるのである。出棺に先ち會葬者に魚料理にて饗應する。それから役僧の嚮導によつて、寺院に向ふ。古來近親なる女共、慟哭悲泣して聲調悲痛に、そとろに哀れを催さしむ。これ所謂大鳥の一升泣き五合泣きと稱するもので、泣女の名ある所以で、會葬者は其聲の美醜から、曲節の巧拙まで批評する。近親者は男は羽織の如き喪服を着用し、女は白布を頭に被ふ顔を掩ふ。葬儀終れば精進料理にて馳走する。忌中は女は棺じめを帶とし、親の喪には五十日間謹慎して外に出づることはない。昔は夫の喪にさへ三年も謹慎したと。

**年中行事** 鳥では新年には櫛を門口へ立てる、注連繩を張ることは内地とかはらない。門松を立てるは内地からの移住者ださうな。雑煮は芋と餅とを煮しめて汁を入れない

# 欠

# 欠

住すひ入ひともありとこそさおほしけ大島おほしの、山やまもうさよみたる五月雨あめの空そら

林はやし 羅ら 山やま

迢々たうたう南海濱、舉目不な知ら津、小角來せうかく驅か鬼おに、八郎やちろう譎なげ化く神かみ、

土人どじん畜ちく獸類じゆるい、風俗混ま魚鱗いしん、寄語きこ一漁叟いつりゆう、天涯てんや奈な此身このみ、

近來きんらい、學者がくしゃ文士ぶんしの渡島わたしませられて、吟詠ぎんえいせられた中うちに、特とくに一二いちにを摘錄てきりくしよう。

元村客舍晚望

文學博士 井上 圓了

三原山下坐さんげん孤樓ころう、望裏送迎來去舟、一碧暮天雲斷處、

倒懸たうげん白扇はくせん豆洋秋、

登三原山

文學博士 井上 圓了

千里曠原一望開、石如いし馬糞ばふん土如つち灰はい、仰看おほみ天半雲龍躍、

峰頂登臨呼ほうてい快哉くわいさい、

差木地客居偶成

文學博士 井上 圓了

豆海孤山聳、寒村繞ま四邊、椿林庭自暗、牛糞道相連、

貯<sup>レ</sup>雨<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>炊<sup>レ</sup>飯<sup>ヲ</sup>、戴<sup>イ</sup>鋤<sup>ヲ</sup>婦<sup>ト</sup>向<sup>フ</sup>田<sup>ニ</sup>、客<sup>ニ</sup>居<sup>ル</sup>茅<sup>ノ</sup>屋<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>、坐<sup>シ</sup>臥<sup>シ</sup>静<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>禪<sup>ト</sup>、情<sup>ヲ</sup>調<sup>ヒ</sup>纏<sup>リ</sup>綿<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て切<sup>リ</sup>なる悲<sup>シ</sup>哀<sup>ノ</sup>の曲<sup>ヲ</sup>に、人<sup>ノ</sup>情<sup>ノ</sup>の純<sup>ニ</sup>美<sup>ヲ</sup>を謠<sup>ヒ</sup>ふ大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>の俗<sup>ノ</sup>謠<sup>ヲ</sup>を、歴<sup>史的</sup>に記<sup>して</sup>

島<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の情<sup>ヲ</sup>趣<sup>ヲ</sup>を解<sup>ス</sup>る一<sup>ニ</sup>助<sup>ニ</sup>に供<sup>ス</sup>らう。  
 黒<sup>ノ</sup>潮<sup>ノ</sup>めぐる海<sup>ノ</sup>濱<sup>ノ</sup>の薪<sup>ノ</sup>積<sup>ヲ</sup>や、緑<sup>ノ</sup>蔭<sup>ノ</sup>濃<sup>ク</sup>やかなる椿<sup>ノ</sup>林<sup>ノ</sup>の實<sup>ヲ</sup>拾<sup>リ</sup>や、芋<sup>ノ</sup>蔓<sup>ノ</sup>かへす田<sup>ノ</sup>園<sup>ノ</sup>の勞<sup>ノ</sup>作<sup>ノ</sup>の徒<sup>ニ</sup>  
 然<sup>レ</sup>に、遣<sup>ル</sup>瀨<sup>ノ</sup>ない島<sup>ノ</sup>の乙<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>の、美<sup>シ</sup>い聲<sup>ノ</sup>調<sup>ヲ</sup>に、悲<sup>シ</sup>哀<sup>ノ</sup>な、どことなくしめやかな、俗<sup>ノ</sup>謠<sup>ヲ</sup>  
 が風<sup>ノ</sup>につれ、空<sup>ノ</sup>氣<sup>ノ</sup>に波<sup>ヲ</sup>をうたせて、餘<sup>韻</sup>嫋<sup>々</sup>と流<sup>レ</sup>て來<sup>ル</sup>てあらう。

エー私<sup>シ</sup>や大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>火<sup>ノ</sup>育<sup>チ</sup>

胸<sup>ニ</sup>に煙<sup>ヲ</sup>は——絶<sup>え</sup>やせ——ぬ

と。これが大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>であつて、その一句、その一語或<sup>ハ</sup>は高<sup>ク</sup>、或<sup>ハ</sup>は低<sup>ク</sup>、何<sup>ノ</sup>の飾<sup>リ</sup>もな  
 く、少<sup>シ</sup>の偽<sup>リ</sup>りもない、たゞ目<sup>ニ</sup>に映<sup>リ</sup>る自然<sup>ノ</sup>の光<sup>ノ</sup>景<sup>ノ</sup>の興<sup>ヲ</sup>ふる寂<sup>ノ</sup>寥<sup>ノ</sup>な、壯<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>な、崇<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>な、  
 感<sup>シ</sup>じと、この狭<sup>キ</sup>い天<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>に働<sup>ク</sup>孤<sup>ノ</sup>獨<sup>ノ</sup>な心<sup>ノ</sup>細<sup>キ</sup>い生<sup>ノ</sup>活<sup>ノ</sup>とが、其<sup>ノ</sup>儘<sup>ニ</sup>に力<sup>ヲ</sup>強<sup>ク</sup>溢<sup>レ</sup>れて、自<sup>ラ</sup>純<sup>ニ</sup>朴<sup>ニ</sup>  
 な生<sup>ノ</sup>活<sup>ノ</sup>と、其<sup>ノ</sup>うち燃<sup>ル</sup>ゆる情<sup>ノ</sup>緒<sup>ノ</sup>とが思<sup>ヒ</sup>知らるゝのである。  
 今日<sup>ノ</sup>の大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>は、その昔<sup>ノ</sup>、配<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>の人<sup>ノ</sup>が、折<sup>ニ</sup>にふれ、波<sup>ノ</sup>の鼓<sup>ニ</sup>に思<sup>ヒ</sup>を通<sup>ハ</sup>せて、故<sup>ノ</sup>郷<sup>ノ</sup>を

懐<sup>キ</sup>ひ、戀<sup>々</sup>たる至<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>をやりたる、謠<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>の聲<sup>ノ</sup>調<sup>ヲ</sup>が、島<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>によつて純<sup>ニ</sup>化<sup>セ</sup>られたのであら  
 う。現<sup>ニ</sup>一部<sup>ニ</sup>に傳<sup>フ</sup>つてゐる、樵<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>といふのがある。これは管<sup>ノ</sup>笠<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>とも、隆<sup>ノ</sup>達<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>とも  
 いつて、平<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>を語<sup>ル</sup>が如<sup>キ</sup>き、古<sup>ノ</sup>雅<sup>ノ</sup>なものである。これは隆<sup>ノ</sup>達<sup>ノ</sup>とかいふ僧<sup>ノ</sup>の流<sup>ノ</sup>寓<sup>ノ</sup>して、  
 傳<sup>ヘ</sup>たものださうな。

隆<sup>ノ</sup>達<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>

白<sup>ノ</sup>鷺<sup>ノ</sup>の磯<sup>ノ</sup>邊<sup>ノ</sup>の松<sup>ノ</sup>に巢<sup>ヲ</sup>をかけて、波<sup>ノ</sup>はうつともなだにそだたば。  
 行<sup>ク</sup>も旅<sup>ヲ</sup>、また行<sup>ク</sup>末<sup>ノ</sup>も旅<sup>ヲ</sup>なれば、空<sup>ノ</sup>行<sup>ク</sup>雲<sup>ノ</sup>のさだめなきもの。  
 差<sup>シ</sup>木<sup>ノ</sup>地<sup>ヲ</sup>をゆきく君<sup>ノ</sup>に逢<sup>ヒ</sup>に出<sup>テ</sup>、契<sup>リ</sup>畑<sup>ノ</sup>の露<sup>ノ</sup>のおなさけ。

身<sup>ハ</sup>はここに思<sup>ヒ</sup>し君<sup>ハ</sup>はあの奥<sup>ニ</sup>に、天<sup>ノ</sup>の釣<sup>ノ</sup>舟<sup>ヲ</sup>りやうてこがれん。  
 この平<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>琵琶<sup>ヲ</sup>を聞<sup>ク</sup>やうな、隆<sup>ノ</sup>達<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>や、配<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>の人<sup>ノ</sup>の傳<sup>ヘ</sup>た種<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>の曲<sup>ノ</sup>想<sup>ハ</sup>は、一<sup>ニ</sup>に島<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の  
 情<sup>ヲ</sup>趣<sup>ヲ</sup>に醇<sup>ニ</sup>化<sup>セ</sup>られて、所<sup>ノ</sup>謂<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>となつた。故<sup>ニ</sup>にこの節<sup>ハ</sup>は大<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>獨<sup>ノ</sup>特<sup>ノ</sup>の調<sup>ヲ</sup>で、樂<sup>ノ</sup>器<sup>ノ</sup>に移<sup>ラ</sup>  
 すも、其<sup>ノ</sup>妙<sup>ノ</sup>趣<sup>ハ</sup>は島<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の口<sup>ノ</sup>づからでなくては、味<sup>ハ</sup>はふことの出<sup>ノ</sup>來<sup>ぬ</sup>、純<sup>ノ</sup>の純<sup>ニ</sup>なる聲<sup>ノ</sup>樂<sup>ヲ</sup>で  
 ある。



大島節

私しや大島御神火そだち、  
 私しや大島荒濱そだち、  
 相模炭だよ真鶴石だ、  
 行つてこいやい四合の山へ、  
 日寄都合て巻かも知れぬ、  
 杉の若萌見たよな殿御、  
 波浮の御池の茶釜の水は、  
 波浮を朝巻さやかすかに見ゆる、  
 波浮の港でドント打つ浪は、  
 波浮の港はさんちやく港、  
 波浮と差木地や一里に近い、  
 錨をこいて帆をまく時は、

胸に煙はたえやせぬ。  
 色の黒いも親ゆづり。  
 なぜか大島は薪ばかり。  
 せめて十日もいたら来い。  
 涙こぼすな露ほども。  
 人にとられてなるものか。  
 湧も早いがさめやすい。  
 遠くなる程なつかしい。  
 可愛い男の度胸だめし。  
 紐のないのが珠に瑾。  
 女郎と丹那子は三つちがひ。  
 真から涙がほると出る。

男達なら乳ヶ崎沖の、  
 乳ヶ崎沖まで見送りませうが、  
 潮の早い止め様で止まる、  
 國へ行くなら言傳たのみ、  
 嶋といふ字は山偏に鳥だ、  
 會ひたい見たいが山々なれど、  
 神津島から大島見れば、  
 相模灘をば両手で拜め、  
 さてはトントと雨戸を叩き、  
 ならひ(北風)吹けとは船頭衆のことよ、  
 椿油にそうめんしぼり、  
 島の女は前掛かける、  
 島を宵に出す松輪じや夜明け、

潮の早いをとめて見ろ。  
 それから先は神だのみ。  
 とめて留まらぬ川の水。  
 まめてゐるかといふてくれ。  
 鳥が飛んでも山のこる。  
 はなれ鳥故是非がない。  
 にくい利島が影になる。  
 可愛い旦那子の乗るうちは。  
 心まよはず西の風。  
 島の娘の程のよさ。  
 意気か仕末か生意気か。  
 鼻の浦賀を手に取りて。

直に其帆で御江戸の川までに。

さまの思ひをますならば、

御影見てさへなつかしい。

ちと帆を下げて地をのりな、

九尺二間に兩戸が一本とは私の事よ、あちらたてればこちらが立たない、

こちらたてればあちらが立たない、兩方たてれば身が立たない。

これにハイノハイ、ズイノズイ、とか或はガシヤガシヤバネーラレナイ等の拍子を入れる。

尙次のやうなものもある。

七 島 歌

島の始めは大島原で、利島つまんで新島よ、袖を式根にとまり島、親はなけれど神津島、三本岳を後に見て、八丈反子積みに来て、めてたくれさまる三宅島

薪 積 歌

間伏積場は荒い様で静か、風がなきても小さい舟をつけて、間伏積場へ廻り込む、直

に其日に早や積出して、積んでくり出しやこちらの風、こちらの嵐をまともにうけて、すぐに其帆で品川まで、西の一番に錨やりて、かこの若い衆は潮待ちる。

又盆踊りの歌に次のやうなのが見わた。

添ふあゝ殿は、この世を捨て、未來だい所の極樂へ、御江戸は見ずし、走り舟は見えず、せめて踊ても踊りてや。

十、名 産

と、配流の人を慰めんとてか、如何に、まだこの外敷多けれど繁を避けて略しつ。

椿油 島にて一般に製造せられ、婦人の髪に効あることは天下一品也。この油を搾りたる粕は髪洗粉として珍無類也。髪かみの氣け少すくき婦人よや、毛けの色いろあしき方々かたがたは試こころみらるゝが宜よろしい。

牛酪は島の特産で、頗る良好のものだ。煉乳會社に於いて製造される。

大島炭 さくら愚の如く、内地に頗る輸出せられて、價格廉なるを以て、好評也。

### 十一、旅館案内

大島に於ける旅館の主なるものを擧ぐれば次の通りである。

元 村

三原館 柳瀬勇次郎

千代屋 柳瀬 政吉

野増村

吉田館 吉田金之助

大黒屋 植村巳喜太郎

波浮港村

松下屋 松下 正吉

何れも懇切丁寧に待遇してくれる。着實な純朴な處が島の特色である。

# 欠

# 欠

## 火を噴く島

大町桂月

(上)

大 1 島

亞細亞大陸には活火山なし、唯我日本には、九州に阿蘇あり、霧島あり、關東に淺間あり、那須あり、奥羽に盤梯あり、吾妻あり、日本は火山國也。されど、鐵路東京より京阪を経て、馬關に至るまでには、畿内及び東海、南海、山陽、山陰、四道の山川を願望して見よ。箱根の大地獄に噴火の餘勢を留むるのみにて、富士山を始めとし、火山はあれども、すべて皆死火山也、唯大島には、三原山ありて火を噴く。その火を噴くと云ひ、その大さといひ、大島の畿内及東海南海山陽山陰四道に於けるは、猶我日本の亞細亞大陸に於けるに似たらずや、大正二年の冬、われ伊豆山温泉に浴し海上遙に大島を望み、日本の縮圖を見る心地して、遊意頻に動く、轉じて伊東温泉に浴するに及びて、終に之に航す。妻も五歳になれる四郎も共にす、妻は船暈の癖あり。わ

れ、勧めざりしが、自から奮つて行かむと請ふ。大島の女は、髪黒く、且つ長しと聞く、その如何にして斯くなれるかを研究せむとする也。それも老境に入らむとする我身の爲めならずして、行先長き我娘の爲め也。われは三原山の活火を見むとする也。内地と異なる島の風俗を知らむとする也。當年配流せられたる鎮西八郎の遺跡を弔はむとする也。

父曰三原峯。噴火堪登臨。八郎雄圖跡。豈可不弔吟。

母曰大島女。寥々黒髮深。欲使我女做。不顧船量侵。

兒也無所解。唯隨父母尋。風浪十餘里。扁舟載兩心。

元村に上陸して、三原館に投ず。孤島には思ひも寄らぬ旅館なり、大島に六箇村あり。元村、岡田、泉津、野増、差木地、波浮これ也。元村が島中の都會也。人家凡そ千戸、他の五箇村を合するも、元村ほどの人家なしと聞く、港は唯波浮港あるのみ、大船を入るゝ能はざるが、百噸内外の汽船ならば、優に四五艘を入れ、波靜にして碇泊に便也。大島節に曰く。

波浮の港は巾着港。惜しい處に紐が無い

宿屋の番頭を導者として三原山に上りけるに、一時間半にして、噴火口に達せり。以爲へらく、我妻も我兒も上るを得べしと。翌日。妻兒を伴ひ。番頭の外に島の女一人雇へり。番頭は折々幼兒を負ひ、女は酒辨當などを頭に載す。番頭は東京の産、久しく伊東に居りしが、終に大島に來り、永住するつもりにて、島女を娶れりといふ。女は年十六、甘つたるく、やさしき語音を帯びて、如何にも可憐也。その着物の縞柄小さく、内地ならば五十歳以上の女の着さうなもの也。荒い縞を着れば笑はれるよといふ。噴火口上に至り、盛に上れる硫烟を眺めつゝ午食し、去つて湯場に至り、蒸風呂に浴し、黄昏宿に戻りぬ。番頭大島節を善くす、且つ歩き、且つ歌ふ、四郎聞き覺えて、宿に歸りて後も、その眞似して曰く、

ア、私しや大島御神火育ちヨ、胸に煙はナア絶えやせぬハイノハイ。

東西二里半、南北五里の孤島に、さても思ひも掛けぬは、三原山の噴火口の偉大にして、且つ整然たる事也。舊噴火口の外壁は、周圍三里に達す。其中に新噴火口あり。

その外壁は、舊噴火口の外壁よりも高くして、周圍一里あり。その新噴火口の中に、更に大森山あり。中村山あり。大森山は大森博士に因み、中村山は中村博士に因める也。複成火山の標本として、天下無類也。

湯場と稱する處は、湯は出でずして、唯湯氣を噴く、自然の蒸風呂にて、儂麻質などに特效あり。大島六村の共有にして、番人を置く、屋舎陋隘なれども、二三十人は宿泊するに足れり、湯氣の出づるに間斷あり。南風吹く時は、盛に出て、北風吹く時は、少しも出でずとの事也。

大島にて異なるは、女の風也。色白く、髪黒く、且つ長くして、地に達す、未だ嫁せざるは、投島田にし、既に嫁したるは『いんぼじり巻』に巻きあげ、いづれも巾にて頭をつゝむ。女同士の話しあへるを聞くに、何の事やら、更に解らず、頭に物を載する故にや、姿性正し。身長も内地の女よりは、高さ様也。頭に戴くもの、重さは二十貫以上に及ぶ、元村には、飲用水乏しく、家に多く天水を用ひる。井戸としては、海岸近き處に唯二つあるのみ。汲みに來る者は、みな女也。老女もあり少女もあれど

も、多くは年頃の娘也。頭にせる水樋は、二斗内外の量を入れるべしと思はる。大島の女は禪もちて婚姻にゆくと云はるゝくらゐにて、よく働く。老いて益よく働く。頭に薪を載せつゝ、牛曳く老女の年を問ふに、八十歳以上のもの少なからず。

百歳のをんな牛曳く椿かな

『大島名物牛の糞』と云はるゝ程にて、牛多く、従つて牛乳の價一合わづかに一錢五厘也。牛乳は島にて牛酪にす。山に椿多し。取りて椿油を製す。大島の名産也。大島の女は婚姻の時は粗服を纏ひ、葬送の時は盛粧すと聞く。両親は長男に嫁を取れば、直に別家し、次男に嫁を取れば、又更に別家し、一切子の厄介にならず。子が多ければ、多き程、多く働かざるべからず。もとは女働きて、男は座食すといふ風なりしも、内地より男人り込むに及び、島の男の懶眠覺めて、内地の男と同じく働くやうになれり。女は三尺を締め、紋付を着て野に働さしが、内地との交通繁くなるにつれて、今は紋付を纏ふものなく、服装漸々内地化しつゝあり。純朴誠實なる氣風もいつしか、内地化せられて、輕薄とならむとするにや。人情風俗の點に於て。大島の内地

に於けるは、なほ、日本の亞細亞大陸、並びに、歐米諸國に於けるが如きか。頭腦は磨かざるべからず。されど、島國の美風を失ふべけんや。余が今日大島の爲めに惜むは、やがて日本の爲めに惜む也。

(下)

大島は日本の縮圖也。當年大島に配流せられたる鎮西八郎爲朝は、日本男子中の眞男子也。大島に八郎を黜じて、大島爲に牛動す。八郎が十五歳にして九州を席卷したるは、何ぞ其れ雄壯なるや。我が爲めに父が勅勘を蒙りたりと聞き、僅に二十八騎を率ゐて上京し、身を以て父に代らむとせしは、何ぞ其れ殊勝なるや。白河殿の合戦に、惜しや、その奇策用ゐられざりしかど、八郎一人の強弓は、以て千萬人を防ぐに足る。平清盛は辟易して去れり、兄の善朝來るに及び、わざと之を射殺さざりしは、花もあり、實もありて、八郎の八郎たる所以也。げにや一木大厦の倒るゝを支へ難し。八郎の武運盡きて、大島に流されしは事實也。保元物語一部の主人公は八郎なるが、同書には、八郎一箭にて兵船を射沈め、從容として自害したりとあれど、大島には八郎

欠

# 欠

港内の深さは十五尋に及ぶも、入口は淺し、港の東方、水に接して一列の人家あり。唯一條の水路を餘して、四周みな絶壁也。もと火口湖なりしが、元祿の海嘯に一壁破れて海と連り、上總の人、秋廣平六、開いて港となしたりと聞く、數年前に、開港百年祭を行へり。港のひろさは、東京の不忍池の半分もなし。可愛らしき港として、天下無類也。而して大島に於ける唯一の港也。大島の薩摩芋の最下端を波浮とすれば、最上端は千ヶ崎也。三原の裾野、首を擡げて怒濤に俯す。このあたりの裾野が大島中最も廣き處也。三原の最高峰は、大島中、唯この千ヶ崎より見るを得べし。千ヶ崎と三原最高峰とは、肝膽相照すの概あり。土謠に曰く「男伊達なら千ヶ崎沖の汐の早いを止めて見よ」と。大船巨船直に脚卜を過ぐ。前は富士を始めとして、豆相、甲駿、信遠の諸山を望み、左は利島、新島、神津島を望み、右は三浦半島と房州とを望み、顧みて三原山を仰ぐ。熱海伊東より見れば長鯨の横はるが如き初島、こゝより見れば芋蟲の這ふが如し。眺望の佳なること、大島第一也。

一高の生徒五人來り話したるついでに、先生、三原山の噴火口に下られしかといふ。



われ二度までも噴火口に臨みたれど、口内には下らざりき。生徒の言に勵まされて、岡田如風を伴ひて、噴火口に下り、口内に隆然たる大森山目ざして行く。新らしき鎔岩、龜裂して、行くこと、甚だ困難也。進む能はざる處に至り、引返さむとして願れば、二少年の下り来るあり。導者とあぼしき老女、孔上にありて、あの人の處へ行くんだよ、小さき石を拾つて来るんだぞと叫ぶ。二少年近づく。君等は何處へゆくと問へば、波浮と答ふ。今日の行程に非ず。孔の中にての行先也。われらは、あの大森山に上らむとすと云へば、共に上らむといふ。孔壁まで引返すに、新鎔岩、孔壁までは達せずして歩き易し。いよく孔壁を傳ふ能はざるやうになりて、直に大森山めざして行く。孔上の老婆、大聲を發して、あぶないよ、行くんぢやないよ、戻れよと叫ぶ。之を顧みずして、終に大森山の頂に上れり。大森博士の調査せし頃には、この山、中央に火口を控へて、完全なる圓錐形を成したる由なるが、今は一半崩れたり。盛に硫烟を吐く處、二箇所あり。山全體はコークスを積み上たるが如し。新しき火山弾、俗に芋石と稱する者を拾ひて戻り來り、孔上に硫烟を眺めつゝ、少年の一行と共に

に午食す。案内の老女曰く、皆さんは豪いよ、先日二人の若き人を伴ひ來りしに、底までは下る能はず、命拾ひをしたりとて戻り來れりと。酒を加へざる少年の午食を馬の歩みとすれば、酒を加ふる我等の午食は牛の歩み也。少年の一行。先づ去れり。我等は三十分おくれで發足し、内輪山をほゞ一周し、三原の最高峰に上れり。これよりは少し低けれども、外輪山中の最高峰なる三原白石山にも上れり。その山上にて百四三十年前の火山弾を拾へり。歸り來りて一高の生徒に語りて曰く、君等は噴火口に下りたりと云ふが、口内に下るは、何の造作もなし。君等は口内の大森山に上りたるか、芋石を拾ひたるかと、生徒等また我言に勵まされて、再び噴火口に下り大森山に上り。芋石を拾ひ來れり、快男子、卿等は山にすれば噴火山也。死火山にあらざる也

泉津に一宿したる夜こそ面白かりけれ。同行の岡田如風尺八を善くす。酒間、尺八なきかと宿に問へば、有りとして尺八來ると共に、山科工務所の馬場盛政氏を先立てし、同好の者三四人酒を持ちて來る。且つ飲み、且つ吹き、且つ歌ひて、夜の更くるを知

らざりき。明くれば、導者を雇ひて、波浮さしてゆく。先づ石のそり橋を見、次に櫻株を見、次に行者窟を探る。そり橋は奇觀也。櫻株は偉大也。行者窟には役行者の石像ありて、漂着せる材木堆積す。役行者が材木店を開けるやう也。奥山の農舎に午食し、砂漠を越え荆棘の中をくぐりて、ごせ川に下る。願れば、如風の雙脚、鮮血淋漓たり。痛からむと云へば、風流は痛きものなりとて笑ふ。大島唯一の浮能の瀧を見て、おたい濱に下る。筆島、海に直立す、日は將に暮れむとす、冬を知らぬ大島なれど、風寒し。波は絶壁を拍つ。引返さむかと云へば、裸體になれば、渡らるべしとて導者先づ裸體になりて過ぐ。波腰に及べり。余等二人衣を解きつゝ、願れば、絶壁より清泉進り下り、鶉の棲めるもの幾十羽なるを知らず。口を開きて待つは、鶉の子にや。鶉の親、魚をくはへ來つて子に與ふるさま、如何にも可憐也。余の過ぐる時は波背中に及べり。われ寒戰す。如風我に濡れたる襦袢を譲りて、寒からむと云ふに、風流は矢張り寒きものなりと、苦笑しつゝ、導者に尾して、石の上を傳ひゆきしに、また絶壁に逢ふ。ここを過ぐる時、波我頭の上を越すこと二三尺に及びたりき。波を被

ることは、これにて免れたるが、なほ裸體にて磯を傳へり。磯盡きて、衣服を着よと導者の言ひし時は、いと嬉しかりき。この導者、頗る豪膽なり。水兵となりし事ある由にて、祖父は五千石の旗本なりきと聞く。

波浮に一宿して、朝、海水に顔を清め、そのついでに漁市をぶらつく。東京風の居酒屋あり。石油の罐を竈となして、何をか煮るらむ。味噌汁たぎりて、芳香鼻を衝く。入りて酒を乞ひ。鍋の物を分たずやと云へど、我等の食ふ粗品なり、客に出すべきものに非ずとて肯んぜず。その代りにとて秋刀魚を焼きて出す。主人は二十四五歳位にて、その妻は二十歳未満に見ゆ。如風主人に向ひて、この方を何者とか見ると問へば、醫者ならむといふ。大島にては衣食する能はざる身なりと云へば、さらば畫家をやといふ。遠からざれども、中らずと云へば、さらば新聞記者ならむといふ。益近寄り、如風語を轉じて、君は雑誌を讀むかと問へば、『實業之日本』を讀むといふ。『學生』を讀むかと問へば、『學生』も讀むといふ。いと嬉し、さらば大町桂月の名を知るならむと云へば、大に知れり。大町先生の新學生訓をも愛讀すといふ、この方

が大町先生なりと如風余を指せば、然るかとして、大に驚く。斯る孤島の漁市に、愛讀者あらむとは思ひがけざりき。嬉しさの餘りに今一本注文して酔を買ひぬ。

大正三年の元旦を迎へたるが、紙鷲あぐる童子あれど、羽子つく女子は無し。鳥廳の門には松を立てたるが、村役場にも、小學校にも、榭を立てたり。普通の人家にも及びて、移住の人は門松、土着の人は門榭、區別が一目瞭然たり。村長に乞はれて講演しけるが、其夜、余の爲に歓迎の宴を張りしに、余を中心として右は土着人左は移住人と區劃がつき居りたりき。

二日の日の出を三原最高峰の上に見むとて、同志五人を募り、夜十時宿を發足し、十二時湯場に着し、主人を叩起して、蒲團を借りて、暫時眠り、午前五時發足して火口原に至りしに、陰霧内輪山を蔽へり。上るも徒勞に過ぎずとて、枯木を集めて、火を焚き、且つ飲み、且つ食ふほどに、雨至り、濃霧襲ひ來る。漸くにして元村への下り口を探し出し、滑かなる急坂を轉びながらに下りぬ。

元村の村長清水岩藏氏は、大島に名たる、火山通也。余の爲に導をなして、噴火口に下り、ナウマン山に上り、中村山にも登りぬ。ナウマン山は明治の初年に出來たりしもの、中村山は明治四十五年の春出來たりしもの、先日上りし大森山は、明治四十五年の秋出來たりしもの也。大森山の出來たりし頃は、ナウマン、中村の二山は、幾んど其形を沒したりしが、大森山次第に崩れ落つると共に、また頭を擡げたり、一行十七人、余等は孔内を半周して戻りたるが、全周せし勇者三人あり、元村小學の横澤熊次郎氏之が唱首たり。その健氣さ、喜ぶべし、外輪山に戻り來り、火を焚きて牛肉を煮、砂上に團欒して、且つ飲み、且つ歌ひしは、人生得易からざる酒宴なりき。

元村の戸數六百三十、牛三百三十頭、内六頭だけが種牛なりと聞く。乳を出す牝牛は、大島人の金穴にして、牝牛は無用物也。牝牛は生れたてにて既に五六十圓の價あれど、牝牛は五六圓にて賣り飛ばされ而して屠殺せらる、大島の牝牛の運命は果敢なき哉。

われ散歩するに、頃刻の間、相遭ふの牛、幾十頭なるを知らず、いづれも余を見て大に恐るゝものゝ如し、我容貌服装は、異様に非ず。牛は如何なれば、我を恐るゝぞわれ散歩するに、必ずステッキを持つ。讀めたり、牛は我ステッキを恐るゝならむ。ステッキを持たずに行く。牛なほ恐る。さてはステッキを恐るゝにては無かりき何の恐るゝ物がある。われ散歩するに、絶えず巻煙草を吹かす。讀めたり、牛は我巻煙草の火と煙とを恐るゝならむ。巻煙草を吹かさずに行く、牛なほ恐る。さては巻煙草を恐るゝにても無かりき。この外に、何の恐るゝ物がある、すべて、動物は人の目付を見て、直に其意中を知るの本能ありと聞く。われ牛に害意を有する目付をせず、又牛を恐るゝ目付をせざれど、強度の近視眼にて、眼鏡を掛く、その眼鏡の硝子光り、洋銀の縁光る。これ他の島人には無き所也。あゝ、讀めたり、牛は我眼鏡を恐るゝならむ。眼鏡を外して行く。されど、眼鏡を外しては、われ幾んど盲目也。牛なほ恐るゝか、恐れざるかを見る能はざる也

伊豆大島 終

大正三年八月廿四日印刷  
大正三年八月廿八日發行

定價 貳拾錢

著者 齋藤 要八

發行者 原 ちか

印刷者 西原 重暉

伊豆國伊東町松原五百三十六番地  
東京市麴町區内幸町四番地



伊豆伊東町猪戸温泉場

福住屋商店

發售元所





文學士中内蝶二先生著  
**伊東案内記**

四六判洋裝頗美本  
口繪寫真版數十葉入  
增補訂正再版出來  
特價 金拾貳錢

本書は萬朝報社會部主任記者として文名高き中内文學士が其得意の才筆を揮つて極めて平易に且つ詳細に書き綴りたるものなれば、他の地方の案内記の如く無味乾燥のものにあらず遊覽の樂たると同時に面白き讀物たる事勿論也。  
本書は遊覽者の便宜の爲め、特に汽車、汽船、馬車等の賃金及順路を始め、浴費、泉質等を精細に調査し、最も正確に紹介したれば、旅客は本書を案内として心安く伊東温泉に遊ぶ事を得べし。

發行所 伊東町松原榮町  
文泉堂書店

# 文泉堂書店

▲文泉堂營業目錄▼

新刊書籍

月刊諸雜誌

學校用品

名勝エハガキ

卸小賣

339  
488



終

